

『母はいま、熱海に行つて、留守なの、だから、泊て頂けるなら——』

『嬉しいわ、今夜はゆつくりお話しませうよ、あたし、とても澤山お話ししたいことがあるの』

田鶴子は手を拍いて女中を呼んで、風呂の加減を見るやらにと命じた。

『あたしなら、好いのよ、田鶴さん』

『さつと浴びてらつしやいよ。疲れがなほるから』

それから、明るく笑ひながら、

『きれいにしてらつしやいよ、あたし、病氣でぶら／＼して、お化粧のものは揃へて、よ、遠慮なく使つて頂くわ』

『もう眠るだけなのに、お化粧したつて仕方がないわよ』

『あら——ひよつとしたら、兄さんが歸つて来るかも知れないから、それで云つてるのよ』

『今頃、大阪の方から着く汽車があるの？』

『九時頃に着く特急があるでせう。多分、たとへ朝ついて、あの人のことだから、会社に顔を出したり銀座で遊んだり、してるかも知れないわ。あ、兄さん早く歸ればいゝのに！』

あなたを見たら、どんなに喜ぶでせう！』

それをきいて、眞理子はふと赭い顔をした。

『兄さんは、とても、あなたが好きなのよ』

風呂から上つて来て、そこに持ち出された鏡臺の前に坐つてゐる眞理子の背ろから、田鶴子は半分は冷かすやうに、半分はまんざら冗談でもなさうに云つた。

『あら、さう、そいぢや、せいぜい、お化粧をきれいにしておく必要があるわね』

『さうよ、ほんとの話よ、眞理子さん』

と、今度はひどく念を押すやうな底力をひゞかせて云つた。

『好かれることは、面倒くさい、さうあなたは思はない？』

と、眞理子は、ふと思ひ出すまゝに云つた。中原に好かれて、先づ第一に困つた。その次に、小澤氏に好かれたら、迷惑しなければならぬと、ひや／＼してゐるのだ。もうこの上は、誰にも好かれて欲しくないやうな氣がした。近藤から、好かれても不愉快ではないが、今の眞

理子のやうに心配の重なつた身には、そのために、お化粧を念入りにするといふだけでも面倒臭いやうな気がする。

『あたしは、好かれた経験がないから、どうか分らないけれど——けど、多分、あたしだつたら面倒臭いより嬉しいだらうと思ふわ』

と、田鶴子は答へた。それが妙に淋しさうに眞理子には聴こえた、病氣だといふが、今日見ると、割にやつれてゐないし、血色もいゝ、要するに、田鶴子は十分に青春の香りの溢れてゐる女だ、それなのに、そんなに淋しいことをいふ、或は、この自分も、田鶴子よりは幸福なのかも知れない……

薄くとも肌色でも顔に刷いておかうかと考へたが、それもやめて眞理子は友達の方へ向き直つた。

『それはさうと、あなたの所へ、南京の榎本さんから、おたよりあつて、近頃？』  
何氣なく訊いた。

『兄さんには、時々、來てるやうだけれど……どうして？』

と、田鶴子はさぐるやうな眼になつた。

『どうしてつて事もないけれど』

と、もう一度赤い顔になつたのを、田鶴子はあはれむやうな眼で見たが、

『あたしが、どうして兄さんのことを話し出したか、分つて下さらないのね』

『だつて、田鶴子さん……』

『あなたは、矢張り兄さんのことより、榎本さんのことが氣になるんでせう、どうせさうよ』

と、田鶴子は、自信ありげに笑ひながら、ふと調子をかへて、

『こちらからこそ、訊きたいのよ。あなたの方どうなの、南京からおたよりがあつて？』

『時々ね、でも、こゝ二十日ばかり來ないの、どうしてらつしやるかと思つて』

『あたしが訊きたいのはね、榎本さん、あなたを誘惑するやうなこといつてか來ない、あたし、

ずぶん心配してゐるのよ』

『あら、榎本さんが、あたしにそんなことをしたら、お差しつかへがあるつて譯？』

これは、十分に冗談めかして云つたつもりだつた。

しかし、田鶴子はひどくまじめに、

『誰があんな人！ あなたがさう思ふなら、あたし、思ひ切つて云つちまふわ、それがお互ひのためだもの、眞理子さん、世の中に、あの人ほど、不道德な色魔はない！ 信用したら飛んだ目に遭ふわよ、あの人つたら！』

やがて、田鶴子が話し出したことは、眞理子を仰天させるに十分だった。

『あたし、生れてからまだ、樫本さんほど見そこなつた人はないわ！』

さういつて『彼は色魔よ、飛んでもない、食はせものだつたのよ！』と、田鶴子は糺弾しつづけるのだつた。

すつかり仰天して物もいへない眞理子に、田鶴子は昂奮で頬を赤くさへしながら説明した。

『あの人にはね、かくし子があつたの、母親といふ人は、むかしミルクホールか、食堂か、そんな風な店を經營してたらしいのよ、學生時代に、うちの兄さんや樫本さんたち、通つてるうちに——』

先日、金をせびりに來た神田厚子の話なのである。どういふ譯でその女と樫本とが戀愛に陥いつたかについては、兄にきいた通りに、すこし尾緒をつけて物語つた。

『とても、厭な女よ、その人！ 生活に困つてゐるらしいの、すつかり落ちぶれて、いつたい樫本さんともあらう人が、どういふ譯でこんな人を好きになつたかとても分らない。樫本さんとの間に出來た、子供も育てかねるといふので、兄のところへ現はれたらしいの』

『その子供、幾つなんでせう？』

と、眞理子は、息ぐるしさうに訊いた。

『五つか、六つでせう。そんな子供を生ましておいて、樫本さんてば無情にも逃げてしまつたわけね』

『……………』

『兄さんは、折角南京で働いてゐる樫本さんに、そんな事知らせたらきつと腐るだらうと思つて、その——神田厚子つて女なんですがね、その女にせびられるまゝにお金をやつちまつたんです』

それから、田鶴子は急に快活になつて、その金を受取りに來た厚子を、自分がいかに思ふ存分手玉に取つてやつたかを、さも面白さうに話した。

(ほんとはあらうか、まさか、そんな嘘をいふやうな田鶴子さんではないし……)

眞理子の頭の中は、燃えるやうだつた。

『ねえ、眞理子さん、わるいことは云はないから、樫本さんのことは、お諦めなさいよ、ねえ』

田鶴子は、眞理子の手を取つて甘えるやうに忠告した。

『諦めるも、諦めないもないわ、あたし、別に……』

と、眞理子は、懸命に感情を表はすまいとしたけれど、青さめて、頬の皮膚さへ硬ばつてゐるのが自分でもよく分つた。

『ほんとは、なら好いけど……あたし、あなたは樫本さんを、少くとも崇拜してらつしやるんだと思つたもんだから、それやあの人立派な人だと信じてゐるわ、でも』

『立派な人が、女に子供を生ませて追放り出して行くもんですか、尤も、あの人だつて、それ

は、ほんの若氣のあやまちといふんでせうけれど——』

『きつと、きつと、苦しんでらつしやるわ。それだけは、信じて上げてほしいと思ふの』

さうだ、かはいさうに、さういふむかしの罪に苦しんでゐるからこそ、内地で一流の大銀行に何の不平もなく勤めてゐた身でありながら、自ら志願して大陸に渡つて行き、苦難の多い仕事に身を投じたのではないか、もし、田鶴子の話が本當だとすれば——眞理子は初めて遠い所に行つた樫本の氣持ちが分つたやうな氣がした。

その夜は、田鶴子と眞理子はお座敷に、二人ならんで寝た。

『今夜、兄さん、歸つて來たら、どんなに喜ぶだらう！』

もうやがて眞夜中だといふのに、表で自動車の音がする度に、兄ではないかと枕から首をあげ、田鶴子はなかく眠らなかつた。

『當分、お泊んなさいな。いつまでだつて、この通り、お愛想もしない代りに、氣兼ねも要らない家なんだから』

『ところが、さうは行かないのよ、あたし、實はいま勤めてるの』

『まア、あなたが』

と、田鶴子は愕いたらしかつたが、そのまゝ黙つてしまつた、何か考へてゐるのだ。

そんなに急に考へに沈まれると眞理子は『お前勤めに出なければならぬほど、生活に困つてゐるのか』と問ひつめられるやうで、ひどく辛かつた。實際に生活に困つてゐるのだから、さう問はれたつて羞づかしがる必要はないのだけれど——矢張り、そんな風に思はれたくないといふのは、不思議な虚栄心だと思ひ、眞理子は情けなかつた。このまゝ田鶴子が眠つてくれば好い。そしたら、自分は夜具の中で、思ひ切り泣いてやるんだと眞理子は心の底で叫んだ。が、又しても、田鶴子は話しかけて來た。

『それで、あなたの勤め口つてのどこ？』

『日本橋の、小澤塗料つて店なんだけど』

『さう！ 月給は……』

『五十圓』

『素敵だわね』

それつきり、黙つてしまつた。

眞理子は、夜着の下に額まで埋めて、いつか涙を流してゐた。

慥本は、果して、田鶴子の云ふやうに、悪い男であらうか——

悪いとか、悪くないとかは別の問題としても、兎も角、慥本に暗い過去のあることだけは、事實としなければならぬ。

それが、わたしに何の関係がある？ と眞理子はこんな問題を忘れてしまはうとしたが、さうすればするほど、涙があとからあとから流れ出て來た。

あの人を、世にも立派な人として尊敬もし、憐れでも來た、そのひたむきな女ごゝろがこんな風に裏切られ、打ち挫かれたと思ふと、口惜しくもあり、寂しくもあつた。

(それで好いではないか、あの方は、あたしの愛人でもなければ、將來の良人でもないのだから——)

とはいふものゝ、矢張り平氣にはなれなかつた。あの方はあの人、わたしはわたし、お互ひ

に生き方は別なのだと、ちやんと分つてはゐるけれど――

ふいに、彼から預つてゐた財産を、焼いてしまったことを思ひ出した。

彼がさういふ男だと分つて見ると、自分はどんな事をして、その財産を返してやらなければ心がさつぱりしないやうな気がしはじめた。

（そんな人の物を失くして、謝つたゞけでは気持ちがわるい。全財産といつたところで大した額ではあるまい。大した額だつたら、あたしたちなんかに預けつ放しにして行けるはずはないんだから……）

悪い男でないのは分つてゐる。だが、彼にさういふ過去があると聽いては、もう以前のやうに尊敬する気持ちになれない、それだから、真理子は悲しかった、それだから、彼女はこんなに泣けて仕方がないのだつた。

（さやうなら、榎本さん！）

## 落魄の人

『やア、昨夜は、どこに泊つたんです？』

翌朝、田鶴子の家を辭して日本橋の店に出て行くと、小澤氏はもう社長室の自分の机のわきに、真理子のための机を用意して待つてゐた。

『昨日はいろいろ有難うございました。昨夜は、ふるいお友達の家に泊りましたの』

と、真理子が答へると小澤氏は安心したやうに、

『それは好かつた。で、當分、そのお友達の家泊るんですね』

『いえ、それも何ですから、今日もう一日お暇いたゞいて、部屋を捜して見ようと思ひますが』

『だから、四五日猶豫を上げてゐるんです、が――』

と、小澤氏は俄に思ひ出したらしく、語調をあらためて、

『實は、昨日、あなたとお別れして歸ると、すぐ吉祥寺の中原氏のところに、電話をかけて見たんですよ』

『マア！』

もう、そんな事までしてゐる小澤氏の手廻しの早さに、眞理子はすこし愕いた。

『それで——あなたのお母さまの熱海の宿の名をきいたんですよ』

『……………』

『勿論、むかうでは不思議がつて、こちらは誰かとききましたよ、だから、あなたの代理だと、強くいってやりました、すると、その中原といふ人、さすがに腰に傷持った弱さですね、

譯もなく熱海の宿の名を云つちまつた、香樂園といふ旅館ださうです』

『あゝ、さういへば香樂園——思ひ出しましたわ』

『どうです、部屋も部屋だが、早速お母さまをお迎ひに行つたら？』

勿論、居どころさへ分れば、眞理子は一刻も早く母を迎へに行つた方がいゝと思つた。

『ぢや、これから、すぐ参りますわ』

小澤氏はすぐ給仕を呼んで、熱海に行く汽車の時間を調べさせた。

今から一時間半ばかり後に出る汽車に乗ることにして、眞理子はその間に、南京の樫本にあて、手紙を書きはじめた。東京驛から乗るのだから、ついでに手紙を驛前の中央郵便局から飛行便で出す事が出来る譯なのだ。

その後は、ながい御無沙汰、お許し下さい。都合があつて、あたし、住所がかはります。引越しましたら早速番地をお知らせしますが、當分は表記、小澤塗料會社宛に御手紙下さいまし、實はあたし、このお店に勤めはじめました。

大變妙なことを伺ふやうですけど、引越して思ひ出すまゝに、思ひ切つてお訊ねします。お預りしてゐるお荷物にもしもの事があつたら大變ですから、火災保険を付けておきたいと存じますの、お金にして幾ら位の額でせうか、大體のところをお洩らし下されば大變都合が宜しいのですけれど、

右、我ながらあんまり奇妙で失禮な質問、どうぞお怒り下さいませんやうに。

今日は、用件のみにて筆を擱きます。

これは又、實によそ／＼しい手紙になつてしまつた。友情などみじんもない、ほんの事務的な用件のみの手紙だ。しかも、お前の全財産だといふあの荷物の値段は幾らだ、など、人を馬鹿にしたことを訊いてゐるのだ。樫本に對してこんなにも潤ひのなくなつた自分の心を、眞理子はふと、不思議に思つた。

汽車は今、品川から大森の海に沿つて、煤煙くさい工場地帯を走つてゐた。

三等車の、割にすいてゐる中で、眞理子は一番前方の隅つこに腰掛けながら、東京驛で買つた週刊雑誌のグラビアを眺めてゐたが、ふいに背ろから、肩を小突くものがあつた。

『……………』

暗い、影の多い痩せた顔に、白粉を部厚く塗つた女が、にやり／＼しながら立つてゐる。誰だつたか？ ちよつと思ひ出せなかつたが、

『あたし、さつきから、あなただと氣がついてゐたのよ』  
といふ聲で、すぐ、あの女だと思ひ出した。

警察の保護室で一緒だつた、あの女である。夫婦喧嘩して深夜往來に飛び出してうろ／＼してゐる所を、刑事につかまつたといふ、あの三十女なのだ。

『どちらへ？ それにしても、妙なところで、お目にかゝつたものですねえ！』

三十女は、さう笑ひながら、眞理子がひとりで占めてゐる腰掛を指して、

『掛けても好いよ。』

と訊いた。

『ど……ぞ』

こんな話相手が出来るより、ひとりで週刊雑誌のグラビアでも眺めてゐる方が、よつぽど増しな怠屈しのぎだと思つたが、仕方なく窓の方によつて座をおけてやつた。

『どちらまで、ゐらつしやるの？』

『熱海まで』

と答へると、三十女は、

『あら、あたしもよ！ 留置場から熱海まで！ これで、お次ぎは三原山まで御一緒だつた』



ら、どんなに洒落てるでせうねえ、ホホ、」

近くの乗客たちに聴こえはせぬかと、眞理子はハラ／＼せずにはゐられなかつた。

『熱海まで、御一緒するんなら、すつとこの席にゐることにしますわ』

さう云つて、女は、今まで自分が腰掛けてゐたらしい中央部の席の方へ戻つて行くと、網棚から大たき風呂敷包みを取りおろして、それを此方の席に運んで來た。そして、眞理子の眞上の網棚に載せ上げようとして、うんと氣張つたが中々重さうなので、眞理子も立上つて手傳つてやらねばやらなかつた。

『どつこいしょ——』

と、やつと網棚の上に片づけてしまふと、三十女はほつとして、

『あなたには、お荷物ないのね』

『え、』

『好いわね、あたしも、ぶらりと荷物なしの旅行がして見たい』

といったが、急に絞るさうに目を光らせて、

『お荷物もなしに……彼氏があちらの旅館を待つてゐる、といふ寸法でせう？』

『あらそんな……』

『まア、謙遜しなくても好いわよ……どうせ警察で知合つてる仲なら、お互ひに見榮を張つたつて仕方がない、それで、旅館はどちら？ ホテル？』

『あなた、香樂園つての、熱海のどの邊か御存じ？ 近頃出來た宿屋ださうですけど』

『香樂園！ 香樂園？ いや／＼これは、三原山まで御一緒の縁がありさうよ、なぜつて、このわたしも矢張り……』

と、さも奇蹟をたのしむやうな朗かさで、

『あたしも、矢張り、香樂園に行かうとしてんのよ！』

これには、眞理子もぞつとした。この女のいふやうに、警察の一夜から、かうまで行く先きが一致する上からは、なるほど末は三原山の噴火口に一緒に飛び込むやうな成行きになるかも知れない、こんな女と、道づれになるやうな世間に、どうせ碌なことの起りつこないのは決つ

てゐる。

『でも、あなたは、どうせ好い人が侍つてゐるのでせうが、わたしは——』

さういつて、三十女は、ふと寂しさうな眼つきになつて、しら／＼と日光の擴がる東京灣の方へ眼を投げた。

しばらく黙つて、それから又、お喋りをつゞけるのだ。

『あんだだからいつちまひますがね、あたしは女中に行くのよ』

『女中に？』

さういへば、この女としては有りさうな話だが、ひどく愕いた容子に見せなければ、濟まないやうな氣がした。

『あそこの經營者を、ちよつと知つてゐるので、女中頭に雇つて呉れないかと、昨日、警察から出るとすぐ、電話をかけて見たんですよ。すると、女中頭にするかしないかは兎も角として人手が足りなくて弱つてゐるから、早速来て呉れといふ返事だつたもんですから……』

『御主人は、お許しになつたの？』

と、眞理子は、相手が一生懸命に喋つてゐるので、お交きあひにそんなことをきいて見た。

『御主人つて、うちの亭主ですか？ その酔つばらひの旦那さまは、あたしが警察から歸つて見ると、家を留守にしてどこかに出てゐたんです。今朝になつても歸つて來ないといふ始末で許すも許さないも、ないぢやありませんか』

三十女は、よれ／＼の黒い羽織の下に着たお召しの、白粉によごれた襟の、抜きえもんも崩れてゐるのだが、それでも妙なしなと一緒に袂の中から朝日を一本取出して火をつけた。

その煙を、うまさうにパツと吐いて、

『どうせ、あちらでお目に掛りますがね、あたし、三つ指ついて、あなたの御用伺ふわよ。女中としたら、かう見えても、上等の部でせうからね』

と、そこで又、ホッホッと笑つた。

『あたし、待つてゐる人はあるんですが、あなたが想像なさるやうな人ぢやないんです』

と、眞理子はにこりともせず云つた。

『どうですか？』

『いえ、ほんとうです、母なんです』

『お母アさん？へえ、それはまア、失禮を申し上げました』

と、冗談めかして頭をさげたとたんに、眞理子は、しまったと思つた。さつき、事務所で書いた榎本宛の手紙を、ハンドバッグに入れたまゝ、投函するのを忘れて汽車に乗つたのを思ひ出したのだ。

どうせ投函するのがおくれたのだから、少し文面を書き直さうかと思ひつゝいた。あの文面は、あまりに素氣なく、薄情で冷淡を装ひすぎた、もう少し、榎本を慰めるやうな文句を書いたつて悪くはないはず……

同席の三十女のお喋りをのがれるためにでも——と、彼女はハンドバッグをあけて中から封書を取り出した。榎本宛の手紙である、封を切つて、自分の書いた文面をもう一度讀まうかと思つたが、その時、三十女の眼が燃えるやうに封書の宛名に注がれてゐるのに氣がついて、眞理子は思はずそれを再びハンドバッグの中に投げ込んだ。

『ちよつと！』

三十女は、眼を怪しく輝かせながら、眞理子の手を掴まへて

『それは、南京の榎本さんに出す手紙ぢやありませんか？』

眞理子はぎくりと振返つた。榎本？なるほど色魔なら、どんな汚い女と知り合つてゐるか分つたものぢやない……

『あなた、榎本さん、御存じ？』

と、三十女は息をはずませながら訊いた。それはこつちから訊きたいことだ。

『あなたも御存じなの？』

『あゝ——まさか、あの人に妹さんがあるはずはないし……あなたは、あの人と餘程ふかいお友達？』

眞理子は、何と答へて好いのか分らないので、黙つてゐた。

『深い、深いお友達？きつとさうなんでせう』

と、三十女はそつと溜息を吐いて、しばらく考へに沈んでゐたが、

『いけないわ!』

と、獨りごとのやうに呟いた。それから、深く思ひを決する所があるかのやうな、きまじめな顔になつて、

『大變、失禮なこといふやうですが、あなたと榎本さんと、どういふ御關係なのでせうか、あたしにお話して戴くわけには行かないでせうか』

『遠縁に當るもんですから』

と、眞理子は、相手が榎本を我がもの顔にして、そんな質問を浴びせかけて來るのに、ひどく驚きながら、やつとそれだけ答へた。

『たゞそれだけですか、遠縁といふだけのことで……』

『それだけです』

と眞理子は腹立たしさを露骨に示しながら答へた。

『さうですか』

と、疑はしさうに、三十女はもう一度ため息を吐いて、

『そんだけなら好いんですがねえ——わたしは、又あの人が、あなたのやうなまじめなお嬢さんに——』

といひかけて、ふつと思ひ出したやうに、

『警察でお眼にかゝつたことは、お互に忘れることにしませうよ。刑事だつてあなたはまじめなお嬢さんだといつてましたわ、それは、どつちにしてもですよ、わたしは榎本さんが、よその娘さんに毒牙を伸ばしてるのを見つけたら黙つてはゐませんからね、といふのは、このあたしが、こんなに落ちぶれたといふのも、もとはといへば、あの榎本さんのためなんだから……』

汽車は、何處かの驛をいま出たばかりの所だつた。多分、横濱だらうが、そんなことは問題ではなかつた。いや、たとへそれが熱海驛で、うつかりしてたために、乗りすごしたと氣がついたところで眞理子はあはてはしないだらう、それどころか、眞理子は、いま現に自分たちが汽車に乗つてゐることさへ忘れてゐるのだつた。

『あなたは、もしや——』

昨夜、田鶴子から聞いた女に違ひないと、眞理子は思ひ出したのだ。

『近藤さんを御存じやないでせうか』

『お、近藤さんから、わたしのことをお聞きになつた？ そしたら、多分、わたしのことは何も彼も御存じでせう、わたしがどんなに榎本さんのために、ひどい目にあつたかを！』

いまは紛れもなく、この三十女が神田厚子である事は明らかである。

眞理子は、今更のやうに、相手の顔を、一種のおそれと共に凝視した。暗い生活のかけに沁みこんで、小皺だらけになつた顔に、むかし榎本を惹き付けたであらう魅力は、みちんも残つてゐない。どうしてこの女のために、いつまでも因縁を付けられるやうなことを榎本はしたのであらうと、いくら考へても不思議でならなかつた。僅か五六年前に、この女が、それほど美しい人だつたらうとは、どうしても信じられないのである。

『あたしは、あの人のために苦勞しました、子供まで生んだんですからね』

『お子さんを！』

『さうですよ、その子がお腹にゐる間に、あの人はわたしを捨て、逃げ出してしまつたので

す。勤めてる会社も分つてたし、あたしは追掛ようと思へば何でもなかつたんですが、あの人の出世のためを思つて、自分ひとりが苦勞すれば好いのだと諦めたんですよ、それからのあたしが、どうして生活したか、思ひ出しても、ぞつとするやうな事ばかりですわ、勿論、いろいろな男を——ホ、。

自棄になつた女つて、強がれば強がるだけ、いろんな男が寄つてたかつて、踏みつけに來るものよ。榎本さんの出世のために、おとなしく諦めたほどの純情を持ちこたへるために、あたしは片一方で、自分の身體をめちやくちやに崩さなければならなかつたの。さういふ氣持ちは、お若いあなたには決して分らないわね。誰も分つては呉れません、誰に分るものか！人は、あたしがあの人のために、犠牲になつた苦しい氣持は察もしないで、あれは墮落した女だ、あんな女と別れて榎本は利口だつたといふだけよ、讃められるのは犠牲になつたあたしではなくて、あたしを踏みつけて行つた榎本さんの方なの！』

厚子は、ぼろ／＼、白く塗つた頬の上に涙を流した。

『それで、お子さんは、いま、どうしてらつしやるの？』

「榎本さんの子は、榎本さんに返したいのですが、矢張り、苦しみながら育て、見ると、人い  
ち倍かはいゝ情がますますものでしてねえ、すゐぶんガン張つて育てつゞけて来たんですが——先  
日、或る人に貰つて頂きましたわ」

なぜか、はつきりしたくないやうな口吻だつた。

「そのお子さんの貰はれた先きを知りたいのですが」

と突込むと、厚子は怒つたやうに、

「それを聞いて、どうするんです？　あなたが、引取つて育て、やらうと仰言るの？」

「さういふ譯ではないけれど……」

もし、今も榎本に對して一味の友情でも残つてゐるなら、彼の血を分ち持つ子供を、せめて  
行方不明にしたくない、といふ氣持ちからかも知れなかつた。しかし、さういふ友情さへも、  
いまの自分の心に残つてゐるかどうか、眞理子は我ながら分らなかつた。

「その子がどこにゐるか、それは是非、あなた方にお知らせしておけば、後日のために何とか  
なると思ふのですけれど——困つたことに、里子にやつた先きの人が——故郷に歸つちまつ

て……」

「故郷はどこですか？」

「さア……九州の方だとはいつてたけれど、そんなことにならうとは思はなかつたので、わた  
し、よく聞いておかなかつたの」

答へを逃げてゐる、眞理子はさう睨まずにゐられなかつた。

しかし、眞理子の心はすつかり打ちのめされてゐた。

田鶴子からはじめて聞いた時にも、すゐぶん驚きもし、悲しみもしたが、それでも、まだ何  
かの間違ひかも知れぬ、間違ひであつて呉れと、一とすじの望みをつないで来たのだが、いま  
思ひ掛けもなく、當の神田厚子といふ女に出會ひ、その女の口から、榎本の過去をぶち撒けら  
れて見ると、もう榎本をかばひたくても、かばふ餘地はなくなつてしまつたのである。

昨日まで、あれほど尊敬し、あこがれてさへゐた榎本を、今日は輕蔑しなければならなくな  
つた。しかし、眞理子は、心の愛人としての榎本を失つた悲しみよりも、そんな無價値な男を

一生懸命に慕ひ、あこがれてゐた自分の惨めさが可哀想でならなかつた。

(あなたは、そんな人であつたのか、平氣で女を弄び、平氣で捨て去る、そんな野獸のやうな汚い心が、あなたの優しい眼や、氣品のある鼻のかけの、どこに匿されてゐたのだらう、樫本さん、あなたは、あたしの心を無慈悲に打ち挫いてしまつた、あなたは泣きたい！ けれどもあなたには、あたしが、どんな傷ましい氣持ちで泣くかも分らないだらう、樫本さん、あなたは、そんな人だつたのか、そんな人だつたのか)

しんに聲をあげて泣きたい、けれども、意地にでも、厚子の前で涙なんか見せたくなかつた。汽車は大船を過ぎ、やがて平塚海岸にさしかゝらうとしてゐた。車輪の響きを、眞理子は自分の心の底の號泣の聲かと、じつと聴きいつた。

厚子は、眞理子のその容子を冷やかに眺めてゐたが、これで自分のお喋りの利き目は十分あらはれたと思つたか、黙つて、氣持ちよささうに煙草の煙を吐きつゞけてゐる。

眞理子は眼をとぢた。

(さうだ、あたしは、身を粉にくだいても樫本さんの財産を辨償しよう！)

彼女は、樫本を輕蔑すると共に、さう決心せずにはゐられなかつた。

輕蔑する男に、どんな意味でもおひ目を持ちたくないのだ。

あんな男の物を預かつて失くしたとて、いつまでも濟みませんといつて、頭をさげてゐるやうな氣持ちではゐたくない、失くしたゞけのものは、きちんと辨償してやつて、お互ひに借りも貸しもなく、きれいさつぱり、赤の他人になつてしまひたいのだ。

とはいふものゝ——

もしも燒失した彼の財産が、數萬圓もするものだつたら、どうだらう、自分の瘦腕でそんなお金が果して拵へ得られるだらうか。

この考へは、俄に眞理子の胸を突き刺した。

(あゝ、あたしが男でさへあつたら——)

眞理子は絶望的に、さう心で叫ばずにゐられなかつた。男でさへ徒手空拳で、數萬圓の金を拵へることは容易ではあるまい、が、男であつたなら、それだけの金を拵へるために、泥まみれになることも出来る、だが、女の身で泥まみれになるといふことは——

次から次へ、考へるに従つて氣持はいよ／＼暗くなるばかりであつた。

『いやに、考へ込んで、わたしのいつたことが、何かお氣に障つたの？』

と、煙草も吸ひ飽きたか、厚子が突然さう問ひかけて來たが、眞理子は答へる氣もしなかつた。

『氣にさはつたら、御免なさい。わたしは別に惡氣で、あなたの御親戚のことを兎や角いつたわけぢやないんですから——それは、わかつて下さるでせう』

『え、それは、もう……』

『つひ、思ひ出すと恨みの一とこともいひたくなるのには、無理のない所もあると、察して下さいね、それほどひどい目に遭つたんですからねえ』

『それに……かう云つちや何だけど、もしも——もしもですよ、もしも、あの人の手に、あなたまで乗るやうなことがあつたら、大變ぢやないの？ 狼のそばに近寄つてる羊を見たら、誰だつて、あぶない、と注意してやりたくありませんよ、一人の處女が、——ごめんなさい、あな

たは處女に違ひないから、あたし、よけい心配ですわ、一人の處女が、良心のない男にひどい目に遭ふといふのは、大變な不幸ですよ、大變な損害ですよ、あたしが、好いみせしめです、前車の覆へるのを——何とかいつたわね、そんな譯だから、ひよつとしたら、折角のあなたの夢を破つたかも知れないけれど、まあ悪く思はないで……』

熱海驛に着くまで、眞理子は惡夢にうなされてゐるやうな氣持だつた。

『どうせ、自動車にお乗りになるのだつたら、わたしも乗せてよ』

改札口を出ると厚子はそんなことをいつた。新しく出來たといふ、香樂園といふ旅館は、驛から海岸に行く途中の、岡の中腹を拓いた處に立つてゐた。大きな門をくゞつて、自動車が玄關の前に停るのを若い美しい女中たちが物々しく出迎へた。

『おや、おや、大變だ、わたしはお勝手口から、入つて行かなくちや叱られちやふわ』

と、厚子がいふのを、眞理子は聞き流しながら、車を降りた。

『東京の中原さんの御紹介で、あたしの母が來てゐるはずですが』  
と眞理子は出迎への女中たちの誰にもなくいつた。



『あの、楠見さまで、おらつしやいますか』

『さうです』

『お待ちかねでゐらつしやいます、どうぞ——』

お待ちかねとは、少し解しかねたが、眞理子は履物をぬぎかけて何気なく、

『母は一人でせうか』

と訊いて見た。

すると、女中の一人が、

『御隠居さまでございますか、御隠居さまは、今朝ほど東京にお歸りになりました……』

眞理子はどきつとして、ぬぎかけた履物を足の裏でじつと踏みながら、

『では、あたしを待つてるのは、誰なの？』

『中原さまが、一時の汽車で、さき程お着きになつてゐまして、あなたさまがゐらつしやいましたら、すぐお通し致しますことに、なつてゐるのでございます』

今朝の、小澤氏の電話で、中原は早くも眞理子が母を迎ひに来るのを察して、こちらに先廻

りして来てゐるのだと、眞理子は悟り、中原に對する新しい怒りに燃え立つたが、

『あたし、ちよつと町に出て來ます。また後ほどに——』

と、あわてずに、女中たちにさういひ残すと、一人で、門の外に出て行つた。

## 南 京 に て

その頃は、南京も占領してまだ日が残く、市街の復興も漸く緒についたばかりで、目抜き通りにはぼつぼつ飲食店や、雜貨店の類ひが、貧弱な店を開き始める程度ではあつたが、砲弾や爆弾で殆ど廢墟のやうに破壊されてゐた街が、日に日に集まつて來る人間の力でだんだん市街らしい形になつて行く、その速度には素晴らしいものがあつた。

軍の或る機關に、囑託として働いてゐる樞本は、民間からの色々な請願を毎日吟味したり、調査したりする仕事を受持つてゐるので、復興の情勢もよく分つた。内地人もどしどし進出して來るし、それに皇軍を信賴する支那民衆の、街に復歸して來る勢ひの猛烈さは、たとへば堰

を切られた水の流が、どつと貯水池に流れ込むにも似てゐた。これらの日本人や支那人が、戦場で破壊された巷に新しい生活を打ち建て、行く、その努力の總和が、つまり南京復興の速力なのだ、さう思つて、日に日に整つて行く市街の姿を見るのは、樫本にとつて心の躍る感動だつた。黒い土埃をあげて再建にいそしむ民衆のたのもしさ、樫本は、人間の生活力といふものに明るい希望と信頼を持たずにゐられなかつた。

(あゝ、この東洋の人間のねばり強い生活力！ これからの輝やかしい歴史を作るのは、我々のこのねばり強さだ！)

本部は街の中央の、或るビルディングを以つて當てられてゐた。樫本の宿舍も、そのビルの七階の一室である。電燈はともらなかつたので、夜は蠟燭がたゞ一つの明りだつた。粗末なベッドと、これはかけた椅子が二つ三つ、それに脚が不揃ひで、いつもがたびしするテーブル——しかし、豊臣秀吉だつて、これほどうれいし心で自分の家具を眺めはしなかつたらうと思はれるほど、樫本は自分の私室に満足してゐるのだ。

はや三月は半ばを過ぎて、七階の窓ガラスを打つ夜風も、何となく物柔かくあたゝかく、金

陵の古都に春は忍び足で近づいてゐる氣配だ。

テーブルの上の、鐘詰の空罐に立てた一本の蠟燭の灯は、大陸の雨風にさらされて、かうなつたかと思はれる黄ばんだ顔を、ゆらゆらと照し出してゐた。その蠟燭の灯で、彼は今、今朝から何度も繰返して讀んだ一通の手紙を、もう一度ひろげたところである。

『何のために、俺の財産の内容なんか、きいて來たんだらう。眞理ちゃん、あなたに預けてある財産は百萬圓以上だ、といつたら、驚くかね、いや、ほんの十五錢で——といつたら、馬鹿らしいといつて怒るかね、どつちだつていゝぢやないか、俺が百萬圓持つてゐようが、十五錢しか持つてゐなからうと、俺といふ男の値打ちが、大して上りも下りもしないだらうに……』

これは、きつと眞理子のお母さんの差し金だな、と樫本はふと氣が付いたのである、眞理子のお母さんは、そんな人なのだ。人の財産が氣になる、さういふ種類の人なのだ。

『お母さん、あなたは、もし僕が百萬圓も持つてゐると答へたら、眞理子ちゃんを僕にくれてよ好いともいふんですか』

さうに違ひない！、樫本はにやりとした。

が、次ぎの瞬間、彼はひどく憂鬱さうに眼を閉ちて、じつと深い考へに沈んだ。黄いろつぼく日に焦け、頬も少しはやつれてゐるが、鼻の形といひ、口もとの品の良さといひ、憂鬱な蠟燭の灯は彼を美しい英雄の彫像のやうに、けだかく脊り高く見せるのだつた。

半分うれしくて、半分憂鬱になる、これが眞理子から手紙が来る度に樫本が陥いる気分なのである。

なぜなら、彼は世界で誰よりも眞理子を愛してゐるから。

愛してゐる女から手紙が来たとして、なぜ憂鬱になる？ その譯は誰にいつても分つては貰へまい。さう樫本は思つてゐる。

この気持ち、誰に分らう？ 人は自分を平凡な男だと思つてゐるに違ひない、その平凡な男が、いま自分が抱いてゐるやうな立派な覺悟を打明けたとして、誰が本當にしてくれるだらう。

自分が大陸に渡つて來た覺悟は、立派なものだと樫本は信じてゐる。

（俺みたいな平凡な男には立派すぎる熱情だ、中支建設の土臺にならうといふ覺悟は！ 人が信じてくれなくても好い、俺が立派にこれを貫徹しよへすれば、それで好いことなのだ。この熱情が、つけ焼刃ではないなら、人が理解して呉れようが呉れまいが、敢て問ふところではない、俺は立派に支那の土になつて見せる、誰かど、俺の屍をそこいらの野蕪だらけな草原の中に埋めて呉れるまで、根かぎり俺は働くさ、それで立派ぢやないか、ところで、さういふ單なる踏臺として朽ちて行く俺だとすれば、この世の榮華や享樂は一切思ひ切らなければならぬ、そんな俺が、もし結婚したら、相手の女はあまり可哀想ぢやないか。俺は斷じて結婚してはならぬ！ 可愛ゆい眞理子よ。何の色彩もない俺の一生の道づれに、あなたをすることが出來ようか。あなたほどの美しいやさしい女は、そんな面白くない人生の道づれにならなくても幾らでも幸福な結婚が出来るんだから……）

彼は東京で、大會社に勤め、社内でも人望がよくて、十分に出世が約束されてゐた。東京にじつとして居るだけで、前途の光明には赫々たるものがあつたのだ。そのまゝで、眞理子の良人たる資格は立派にあつた。求婚すれば、きつと受諾されたであらう……然るにふとしたこと

から、やむに止まれぬ熱情に促されて、大陸の土にたろうといふ覺悟をきめてしまひ、忽然として職を抛ち、中支に渡つて來たのである。折角出世を約束された職を放棄するのは、大してつらくはなかつた。一番つらかつたのは、愛する眞理子に求婚する望みを自ら捨て、彼女から遠い遠い海の彼方に行くといふ思ひだつた。

理想のために、一身の榮達利害を放擲するとは、口でこそいひやすいが、人には中々信用して貰へないことだ。

結婚する望みを捨てたのなら、どんなに好きでも、こちらは失戀するに決まつてゐるのだ、だから——眞理子から手紙が來る度に樫本は、半分はうれしく、半分は憂鬱になるのだ。

『憂鬱になるところを見ると、俺の覺悟といふ奴も、怪しいものだ？』

彼は苦笑しながら、テーブルの上に書簡用箋をひろげた。眞理子に返事を書くためである。

が、何と書くべきか——

預けてあるのは百萬圓だ、大切にして下さい、失くさないで下さい——と、ちよつと冗談に嚇かしてみたい氣持ちも動いたが、なぜかそんな惡戯を書く氣持ちも今日には出て來ないのだ。

た。

が、考へて見ると、自分自身にとつては百萬圓と評價しても、決して不當ではない樫本の「財産」なのだつた。

いろいろ考へた末に、樫本は結局、眞理子に次のやうな返事を書いた。

お手紙、ありがたう、小澤塗料會社にお勤めの由、結構です、どうぞ、お嬢さんの氣まぐれで終らないやうに、やり通して下さい、働くといふことは自己訓練です、これからの女は、どういふ困苦にも敢然と闘つて行けるやうに、精神的にも肉體的にも、鍛鍊しておかなければなりません、こんな教師めいた口調を笑はないで下さい。

あなたは多分、笑はないでせう、笑ふのも忘れたやうな卒氣ないあなたを、今度頂いた手紙で見た。多分、馴れぬ仕事に疲れてるんでせう、私は心配です。いつものあなたは、もつと私にやさしく、友情のコモつた手紙を下さつた。といつて、必ずしもあなたに不平をいつて

るのぢやない。

私の財産についてお訊ねがあつた、何と答へたものか、火災保険など、仰々しいです。失くなつたつて困るほどの物ではありませんし、そんな物にたよつてゐるほど、男らしからぬ男でもありません。尤も、金目で量り切れぬ重要なものも、あの中に入つてゐるにはゐる。私にとつては、數萬圓、と評價したつて安すぎるのですが、それが何であるかは、今はお答へ出来ない。妙な物を、あなたに預けて、全く済みません。重荷になつたら、捨て、貰つても好いのだが……しかし、まア、そのうち一度、内地へ歸り整理したいと思つてゐますから、その節は、重荷を預つて頂いたお禮にあの財産で、あなた方に家の一軒でも買つて差し上げたいと考へてゐます、失禮なことをいふなどと、怒らないで下さい。お互に身うちとて、他にないのですから、まごゝろの表はし方も、みうち同志の遠慮のない表はし方にしたい、といふ私の望みもし不適だつたら、これもお許し下さい。

南京も、次第に春めいて来る、内地はどうですか、近藤兄妹も相變らずでせう。  
末ながら、お母さまには、呉々もよろしく——

書簡用箋に小さく書いて、三枚もつゞき、ずいぶん長い手紙になつてしまつた。

(たのしい気持ちで長い手紙の書ける相手があるだけでも、俺は幸福だ！)

そんな思ひで、にやり／＼としながら書き終つた手紙を読み返してゐると、扉をノックするものがある。

『君、差しつかへないっ。』

と、入つて來たのは、楳本の直接の上司である花本少佐だつた。

『どうぞ』

『手紙かい。いやに細々と書いて——』

『手紙を書くのが、楽しみなやうなものですから』

と、楳本は笑つた。

『ところで、今日は非常に内密な用件があつて來たので、お氣の毒だが、手紙に通はせる望郷の思ひを一時、中斷させて貰はなければならぬ』

と、花本少佐は、無聲のながい顎を突き出すやうにして優しみのある眼を光らせた。

『どうぞ、御用件を仰言つて下さる』

『他ではないが、君に今の職をやめて貰ひたいのだ』

『誠で。』

まさに、癡耳に水のいひ渡しだつた。

『どういふ譯で、やめなければならぬのでせうか、私は、別に落度は——』

『落度はないね、しかし、我々の仕事は、最も經濟的に、能率的にやつて行かなければならぬだらう』

花本少佐はにこりともせずにつた。果して自分は不經濟な雇人だつたか、非能率的な事務家だつたかと、榎本は茫然となりさうな心を引緊めて深い反省に陥らすにゐられなかつた。

『それは、命令とあれば、職を退くほかはないのですが……』

さういひながら首をかしげる榎本を、少佐はじつと思ひやりのある眼で眺めてゐたが、

『命令だ、やめたまへ』

『仕方がありませんね、さう仰言られると……』

『よし、それで話はきまつた。ところで、話はこゝで終つたのぢやない、非常に内密な話になるが、軍は南京を占領し、蕪湖をやつ付けた、とすると、次ぎに、蔣介石の死命を制するため、目ざす所は——』

『漢口でせう』

それをきくと、花本少佐の口もとは、かすかに綻びたが、

『まア、好いさ、北には徐州があり、蘭州がある——こちらは長江沿岸を席捲して武漢まで陥すと、あとは長期建設の段取りになるんぢやないかな。これは僕の個人的な見とほしに過ぎんがね』

何の形容も飾りもなく語られた言葉だが、内容の大きさは聴いてゐても心が躍つて来る。いつたい花本少佐は、一見おとなしい市井の商家の旦那のやうな顔をしてゐるが、少し熱して來て物をいふ時には、一語々に何ともいへぬ力がこもり、眼が輝いて來て、一種の魅力を帯びて來る、いまでもそれであつた。二人の間に立つた一本の蠟燭の灯は、少佐の頬や、額をほの赤

く染めて、その熱情はこちらを壓倒して来るやうな感じだつた。「漢口を押さへたら、あとは長期建設の段取りだ」とは何といふ力強い、そして頭の好い見とほしだらう、長江に沿ふ支那の中原を波の如く蔽ふて行く皇軍の進路、頭の中にはつきり見えて来るやうな氣がして、樞本はじつとしておられないやうな昂奮をおぼえて來た。

『ところでだ』

と花本少佐は、そこで寛いだやうに語調を一轉させて、

『漢口を取つちまつたとして、直に必要なのはあの地方の經濟復興だ』

『それは勿論で』

『銀行なども、すぐ開業して貰はなければならぬ』

『え、』

そんなに早く、占領直後の都市に、いくら漢口とはいへ、市民の經濟生活が、銀行を必要とするほど興り得るものだらうか？

『漢口には戦前、四千以上の日本人がゐたんだからね、陥落したとなると、それらの人は勿

論、その他にも日本人が、資本をもつてどつと彼處に乗込むはずだ、また、さうならなければ嘘ぢやないか、そんな譯で武漢銀行には今から待期して貰つてゐる、武漢銀行といふのは、日本人の銀行なんだがね、事變と同時に漢口を引揚げてゐるんだ、それが占領された漢口へいち早く歸つて行つて、復興の經濟中心にならうといふのだ。さういふ譯で、君は、軍の方の職をやめて貰ふ』

『武漢銀行と私とどういふ關係で……』

『君はその方面に要求された人物なんだ、銀行の専務が、君を呉れと、熱心に所望して來たんだよ、どうだ、話は分つたらう、ハツハツ』

要するに、日本人の資本に依つて戦前創立された武漢銀行は、軍の進出につれて、中支の奥地へ、經濟建設の前衛として、いち早く乗り込んで行かなければならぬ使命を持ちながら、南京に待機してゐるのだが、事變と共に内地に歸つた行員も多數あるので、今は人手が足りなくて困つてゐる、その銀行の専務が目をつけたのが樞本だつたのである。

『といつたつて、あたりまへでは君は到底今の職をやめはしなと思つてね、それで、此方から先手を打つて鹹といふ形式をとつたのだが、どうだ、銀行への身賣りの件、承諾してくれな  
いか。銀行の仕事だつて、國家的な見地からいつて、決して重要さにおいては、今の君の職務  
に劣るものぢやないからね』

『どうも……』

と榎本は考へに沈まざるを得なかつた。

『経歴といひ、學識といひ、君なんか銀行で働くのが、一番好いのは分り切つた話だし、それ  
がまた、人物經濟の法に協つた人物の配置法でもある』

『……』

『君は不服なのか』

『不服どころか、有難いお話だとは思ふんですが……』

『まア我慢したまへ、お國のためにこの中支の土になると覺悟してゐる君だと見込んで、僕か  
ら頼むんだ』

『さう仰言つて頂いては、もう……』

榎本は、きつと顔をあげて、力強く、

『御命令どほり、致します』

『有難う』

花本少佐は、ほつとしたやうに先程、榎本自ら淹れて出して呉れた支那茶の湯呑を口に持つ  
て行つた。

『話が、さう決まれば、云ふがね、實は、銀行の方でも、先方から所望して入つて貰ふんだと  
いふので、君の位置は係長といふことになつてゐる』

『果してその任に堪えますか、どうか』

『君はエキスパーツだ、何も謙遜することはないさ、給料も、今までより倍近くにはなるだ  
らう』

話の途中から感づいたのだが、この轉職は、花本少佐がこちらのためを圖つて、骨を折つて  
呉れたのではないかと思ふふしもあるので、榎本は、何といつて少佐に感謝して好いか分らな



い氣持ちだつた。手馴れた仕事に返れる喜びや、収入が倍加する嬉しさばかりではなかつた。そんなことよりも、自分が大陸建設に、省みて恥づかしからぬ誠實と覺悟を持つてゐることを少佐に理解されてゐる、といふことの有難さで、感動せずにはゐられないのだ。

二人は暫く、茶を吸りながら、黙つてゐた、ふと、思ひ出したやうに、樫本は、

『先程、ちよつと漢口のお話が出ましたが、軍は實際、漢口まで進撃する豫定なんでせうか』

『ハツハツ、そんなこと、俺が知るものか、俺は只、ロマンチックに、壯大な進軍を想像して見ただけの話さ』

『成程、しかし、それはほんとに壯大な想像ですなア』

『どうも、大陸にゐると、夢までが大掛りになる、ハツハツハツ』

『いや、漢口を取ることは、絶対に必要です！』

『ハツハツ、君が參謀總長でないのは残念だ』

これから、いや、今、現に進行しつゝある、日本民族の大なる事業を想つて樫本は目の前の一本の蠟燭にも熱い血のたぎる思ひだつた。

## 春の贈物

捜しても、適當な部屋が見つからないので、眞理子は、結局、アパートを借りるほかはなかつた。

その牛込のアパートから、毎日、日本橋の店に通うて、もう一ヶ月ちかくなつてゐる。一日と暖かくなり、空も何となく霞立つのだつた。さういふ季節といふものは、どんな幸福な娘をも、折にふれて捉へどころのない哀感で打つのだが、況して眞理子は、母と別れたきりだし、あこがれの樫本には幻滅させられるし、春が來たとて心の中はたゞ暗いだけだつた。

あれから、小澤氏は二度も三度も、吉祥寺の、中原の家に談判に行つてくれたが、そのたびに玄開拂ひを食ふだけで、眞理子のお母さんに逢へないのは勿論のこと、中原さへ留守居を使つて逃げるのだつた。眞理子も母に向つて何度となく手紙を書いた、が、梨のつぶてで、何の返事も來なかつた。

だが、いつかはお母さんの方から、眞理子を求める日が来るだらう、眞理子はそれを信じる  
ほかはなかつた。

樫本については——眞理子は考へないことにしてゐる。いや、只一つ、彼の財産を焼失した  
責任だけは飽くまで忘れないことにしてゐるのだ。働いて得た給料もなるべく無駄に使はない  
で、貯金することに決めた。それは、恐らく焼失した財産の額の十分の一にも達しないだらう  
が、でも、自分が力一杯働いた汗の結晶なのだから、それだけでも賠償に充てれば、こちらの  
心は休まるであらう。

だが手紙で財産の具體的な額をき、合せてやつても、眞面目な返事をくれない樫本に、いら  
せせずにゐられなかつた。

(五萬圓なら五萬圓、十萬圓なら十萬圓と、はつきり云つて呉れたら好いんだ！)

地團太ふみたいほどの氣持ちだつた。

『今日は、ちよつと白木屋まで、交きあつて呉れませんか』

或る晴れた日に、小澤氏は突然さう云つて事務机から立上つた。

お買物のお供であらうが、何であらうが、社長の秘書なら、おとなしく、ついて行かなけれ  
ばならない。

『濟みません』

自動車の中で、小澤氏はをどをどといひ譯するのだ。

『やむを得ない買物なので、どうしても、あなたと一緒に行って貰はなければなりません。實  
は親類みたいにしてゐる親しいお嬢さんに贈物しなくちやならないんですがね、僕には、どん  
なものが、近頃の若い娘のお氣に召すのかさつぱり分らない』

『あたしの好みで、お氣に召すか知ら』

『大丈夫だ、——濟みません、あなたが迷惑なのは、よく分つてゐるんだが……』

『あら、ちつとも迷惑ぢやありませんわ』

『いや、僕のやうな男と、デパートの群衆の中を歩くのは……』

『そんなこと仰言るものぢやありません。でなけりや、あたし他所に行つちまひますわ』

『他所に?』

眞理子は、この片輪の紳士がしみく、氣の毒になつて、

『お誓ひなさいよ、以後、決して卑屈なことはいはないと——ね、もしあたしを、いつまでも使つて下さるおつもりなら』

『しかし、ね……』

『あたし、男の癖に、自己憐憫云ふ人、大嫌ひ！』

彼女は、わざと残酷な言葉を選んだ。

『これは手酷い！』

と、小澤氏も、冗談めかして笑つたが、眉のあたりを、ちらとかすめた暗い影は、眞理子の心に打ち返つて来るほど痛ましかつた。

で、後悔にまみれながら、

『ごめんなさい。たゞね、あたしの雇主を侮辱する人は、それがたとへあなた御自身であつても、あたし腹が立ちますの』

『ふむ』

小澤氏は、そつと眼をそらしたが、その臉は涙をふくむやうに、しめつぽく見えた。そこで眞理子は、よくない事をいつたやうな氣がして、いよ／＼狼狽したが、丁度その時、車はデパートの入口に着いたので、ほつと助かつた氣持ちだつた。

果して、デパートの中では、まるでサアカスから抜け出した二人であるかのやうに、群衆の視線のいゝ曝らしものになつてしまつた。

『趣味の呉服もの』といふ賣場で、小澤氏はエレヴエターを降り、跛ひきながらまづすぐに、人を押し分けて行つた。

『どうです。ずゐぶん綺麗ぢやないか、こんな美しい物を着る、この頃の若い人は幸福ですなえ』

帯や、着物が、色彩あざやかに陳列されてある前で、小澤氏は感嘆の叫びをあげた。

『着物を、贈物になさるの？』

と、眞理子が驚いて訊くと、小澤氏はにこ／＼しながら、

「ハンドバッグ位にしようかと思つたんですがね、かうして来て見ると、何だかね、俺もたまには、華やかな着物や帯の買物をする喜びを経験したつて好いではないか、といふやうな気分

に陥いつて来たんですよ」  
「相手のお嬢さまは、きつとお喜びになりますわ」  
「と思ひますか？」

ふと目についたか、非常に複雑な染め方になる、茶の格子に薄紅の花びらをあしらつた小紋を指して、

「あれは、どうです？」

と小澤氏は熱を以つて訊いた。

「しやれてゐますわ、とても意氣ね」

「ぢや、あれを買ふかな」

「贈物になさるの？、あちらさまは、そんなお年でゐらつしやるんですか」  
お嬢さんと聞いてゐたので、愕いて訊いて見た。

「いや、あなたと同じ位の年だと思ふんですが」

「それぢや、お可哀想よ、あの小紋は、三十二三の人に丁度いゝつて柄ですのに」  
と、理真子は笑ひだしてしまつた。

「ぢや、止ませう。ではね、かう見渡したところ、もしあなたが買ふとすれば、どれが欲しい？、あなたの欲しいものなら、向ふだつて同じ年頃だから、氣に入らなつて法はないだらう」

「だつて、それぞれ趣味がありますもの。あたしに似合ふからつて、その方に似合ふとばかりは限りませんし……その方、お背はたかいの？」

「さア……勿論、たかい方でせう」

「すらりとしてらつしやる？」

「躊躇なく、すらりとしてゐる、と答へることが出来ますよ」

「丸顔？」

「すこし長みがゝつてるかな」

『色は。』

『氣味わるいほど白くもない代りに、白粉やけみたいに黒くもない』

『色のお白い方でしたら、あれなど、きつとよくお似合ひだと思ひますわ』

と、眞理子は、陳列の中の紫のしぼり染を指した。あゝいふ着物は、いかにもぞろつとして良家のお嬢さんにふさはしいであらうと思つた。

（あたしも、つひ先達てまでは、さうしたお嬢さんの一人だつたんだが……）

今はちがふ、今は一個の職業婦人だ。身を以て世の荒浪と闘はなければならぬ自分が、鹿の子模様が雲形に入つた紫の絞り染など着たら、さぞおかしいだらうとさへ思はずにゐられない。

『あなたがさういふのなら、あれを買つてやることにしませう』

たつた今、相手の娘はそれほど色が白くないといつたことは忘れたやうに、小澤氏は店員を呼んで衣桁から取りはづさせた。

『ところで今度は帯だ』

と、小澤氏がまた眼を忙しさにし始めたので眞理子はうんざりした。いつたい世の中の女といふものは、たとへ自分の物でなくても着物や帯の買ひ物に立ち會ふだけで、たのしいと云ふのが普通のやうだが、眞理子はさうでなかつた。と云ふより、今の眞理子には豪華な呉服もなど、いかにそれが驚くべき藝術品であらうとも、たのしんで鑑賞する氣持ちにはなれなかつた。彼女は、そんな時代ではないと思つてゐる。よしやこゝに有餘のお金があるにしても、贅澤なものを買つたり着たりするのは、世の中に對して氣がひける。いやそんな眞似をしてゐては、南京の樫本を輕蔑する資格がなくなるやうな氣がするのだつた。樫本は良心のない哀れむべき色魔ではあらう。けれども、彼は占領地帯の困苦缺乏の生活と闘ひながら國家のために働いてゐる。眞理子は、色魔としての樫本を輕蔑するためには、自分も自ら顧みてはづかしくないやうに、質實な銃後の生活者でゐなければならぬと思ふのだつた。

『あの帯は、地が黒いから、じみですかね』

と、小澤氏の眼は、黒地に水仙を織出した一本の帯の上にあつた。水仙の長い葉の緑のいろが、美しい曲線で、それを締めたら、正面のお腹の上を、どんなにか優美に彩るだらうかと思

へるのだが、いくら興味はなくても、さすがに無責任な答へもしかねるので、  
『さうですわねえ、さきほどのお召し物には、調和がわるいかも知れませんが、こちらになす  
つたら？』

と、赤い色だの、金糸など入つてゐる癖に、あつさりした感じの帯を推薦した。

『忘れてゐた、羽織が要つたんですねえ』

『一と揃ひ、お贈りになるの？』

『だつて、その方が、貰つた方でもうれしいでせう』

羽織は、眼も醒めるやうな明るい青とも、水色とも、青磁ともいへる色に、ところどころ紫  
紺を染め分けたものに、意見が一致した。

『さア、これで合計いくらになるかね』

といひながら、小澤氏は店員にそれらの買上げ品を持たせて、十八番賣場と札の下つてゐる  
臺のところへ行つたが、眞理子は一人、黒の振袖の陳列されてある前に立つて小澤氏が勘定を  
済ませるのを待つてゐた。

しばらく店員になにか命じてゐたらしい小澤氏が、やがてあはてたやうに眞理子の側にもど  
つた。

『しまった、着物や、羽織に裏が要ることに、ちつとも気がつかなくつた』

と、小澤氏は跋をひいて近寄りながら眞理子にいつた。

『まア、仕立てまでしてお上げになるんですか』

『すつかり出来上つたのを贈つてびつくりさせるんですよ』

『いゝ伯父さまねえ』

と彼女も笑つた。小澤氏は十八番賣場の臺まで、眞理子を引張るやうにして行つて、着物の  
裏の色だの、羽織の裏の柄などを選ばせた。ふと、眞理子は、親戚のお嬢さんとかいふ人のた  
めに仕立てまで頼んで、いつたい小澤氏はその人の寸法など、分つてゐるのだらうかと疑つて  
見たが、要らぬおせつかいだと思つて黙つてゐた。

やうやく、羽織、着物、帯と、一と揃ひの衣裳の注文を終つたので、ほつとして、これで事

務所に歸れると思つてゐると、エレヴェターまで來た時、小澤氏はふといひにくさうに云つた  
『もう少し、買物につき合つて貰はなくちやならないんです』

仕方がなかつた、今度は太物や銘仙、着尺類の賣場のある階で、エレヴェターを出た。

『銘仙を一匹買ふんです』

『あのお嬢さんに?』

『さうです、濟みません、もう一度、よつて下さい』

驚いろに黒と、反物の幅を縦に殆ど二等分した銘仙を一匹、眞理子は選つて、

『色はじみなやうですが、柄が大きいからお召になれば、きつと派手に目立ちますわ』

と説明した。さやうでございますとも、と側から店員も賛成するので、文句なく小澤氏はそれを買ふことに決めて、

『ところで、あなたの寸法を、ちよつといつてみて下さい』

といひ、彼女をびつくりさせた。

『あたしの寸法を?』

『さうです、これは、あなたに、今日のお禮に差上げたいのです』

これまでに、既に前借りといふ名で、小澤氏は彼女のため洋服や着物を、勤めに困らないだけのものは拵へさせてゐる。その上に、と思ふと、眞理子はうれしいより憂鬱になつて、

『お禮を頂くやうなことは、あたし、何もして差し上げたおぼえはありませんわ』

『楠見さん、そんなに、かたくなる事は云はないで下さい』

『でも、これまでだつて——』

『あ、あの分は、月給から遠慮なく、少しづつ差引きますから』

眞理子がなほも抗辯しようとするのに、耳も藉さない風で、店員の方に、

『仕立て、貰ひますから』

と命じた。店員は素早く、全く、眞理子がうらめしいと思つたほど素早く、紙片と鉛筆とを持って、眞理子の口授する寸法を待ちかまへるのだ。

『さア、早く、仰言い』

と小澤氏の、じつと哀願するやうな眼だつた。心づくしの贈物を快く受けてくれたつて好い

ではないか。そんなに恥をかゝせるものではないと、その眼は懇へてゐる。

「行きは七寸——」

身はゞは、背は——そして「お襟はお抜きになりますか？」どういたしまして、野暮に、きちんと、女學生のやうに着ますと、進まぬ心で答へるのだつた。

それから、一週間ばかり経つてゐた。

その日は、小澤氏のために方々の得意先きや、原料仕入れの取引先きに電話をかける仕事が多馬鹿に多く、秘書となつてから一番忙しかつた日であつた。

「汗を流して——」

小澤氏はいたはるやうに彼女の額の汗を眺めながら、

「まだ馴れないから、疲れますね、今日は忙しい思ひをさせて、済みません」

「そんなに仰言ると、困りますわ、まるで壊はれ物扱ひなさつて——」

そんな取扱ひされるのは、心外だつた。能率の低い、ひよわな者をお情で雇つて貰つてゐる

やうな感じになつて厭でもある。

「ちや、今日は、もう時間ですから、歸つて休養して下さい」

と小澤氏はいつたが、歸り支度をはじめる眞理子を、なんとなく心もとなさうに眺めてゐた。もつと居てほしい、といひたげな眼つきだつた。

すると、小澤氏の寂しさが、ひし／＼と此方の身にも響いて感じられ、眞理子も妙に後ろ髪を曳かれるやうな氣持になる。

「時に、いつかの銘仙は、仕立て上つて來ましたか？」

突然、小澤氏が訊いた。

「いえ、まだ参りません」

「さう、電話で催促してやると好い、あの銘仙は、きつとあなたに似合ふよ、僕はあれから時々あの柄を思ひ浮べて、あなたの着た姿を想像してゐるんですがね」

いやなことだ、と眞理子は心ひそかに眉をひそめたが、

「あたしなんか、何を着たつて駄目ですわ」



『いや、いや、決してそんなことはない。出来て来たなら、早速着て見せて下さいよ』

『え』

そこで、もう話はないだらうと思ひ、お辭儀をして出て行かうとした。

『あゝ、ちよつと』

入口のところまで行つて、立止つた眞理子の方へ、小澤氏は、ごつとんごつとんと跋を曳いて来て、

『あなたに、僕が何を贈つたつて氣を悪くしないで下さい、好いですか』  
と念を押すやうにいつた。

『もう御用はございません？』

あゝ、息ぐるしい、小澤氏の感傷的な文句は聞き飽きてゐるのだ、さういひたいのを抑へながら、彼女は冷めたくいひ放つた。

すると、小澤氏は世にも悲しげな顔になつて、目を床におとしたが、やがて、思ひ諦めたやうに、自分の机の方へ歸つて行つた。

その背ろ姿を見るに堪へないで、眞理子は急いで外に出た。

（あたしに贈物などして、どうしようといふのだらう？ まゝごとでもして遊ぶやうな氣持ちなのか、それとも——）

まゝごと、といふ解釋は、最も善意な解釋にちがひない、もつと意地わるに解すれば、彼は好餌を投げて、徐々にこちらの心を、彼の方へ——

が、アパートに歸つて、しんに驚愕せざるを得なかつた。といふのは、白木屋から、大きな包みが届いてゐた。仕立て上つた銘仙だと思ひながら、ほどいて見ると、銘仙の羽織着物ばかりではなく、思ひ掛けもなく、紫絞りの着物も、金糸の帯も、眼もくらむばかりのあの水色の羽織も、あの日の買物は何も彼も、その包みの中から出て来たのである。

### 男を強打する手

曾ての小澤の何よりの楽しみは一日の事務を終つて家に歸つて、讀書に親しむことだつた。

事業が忙しければ忙しだけ、早く自分の家で一人になりたいと思ふ。勿論、仕事の繁榮する喜びも、人並以上に感じる彼には違ひないのだが、繁榮すればするだけ、僅かの閑を讀書で満たす楽しみは大きかつた。

しかし、今はすこし迷つて來た。楠見真理子が秘書として自分の事務室にいつもゐるやうになつてからは、寧ろ毎日の事務があまり早く退けるやうな氣がして、それがかへつて彼には物足りないのだ。毎日、彼はなるべく長く真理子と一緒にをりたかつた。彼女と別れて、ひとり家に歸るのが、ひどく寂しいのである。讀書だつて、以前ほどは面白くなつてしまつた。廣い和室の書院風な窓の下に紫檀の机がある。そこに坐つて寂然と讀書してゐる自分といふものが、いひやうもな、不幸な人間であるやうな氣がする……。

で、今彼は、その紫檀の机の上に、近頃評判の小説を繕いてゐるのだが、その小説の内容といふのが、若い女に身も魂も打ち込んだ四十男の苦悶なのである。その四十男には愛する妻子もあるし、世間的地位もある、しかるに相手は全くうぶな癖に、鋭い感性や觀察力を持つたお嬢さんなのである。互に愛することによつて、男も女も、男の細君も傷だらけになつて行く、

さういふ筋が、多少作者のおのろけも交つてゐると見えて、熱情を以つて展開されて行くのだが、讀んでゐるうちに、小澤は、この小説の主人公が自分自身であるやうな氣がして來た。勿論、相手のお嬢さんには、楠見真理子を當はめて考へざるを得ないのも、當然の話であらう。

(しかし、俺には妻も子もない、が、それだからといつて、この小説の主人公よりも俺の方が希望に恵まれてゐるといふことも出來ないのだ)

自分は醜い片輪である。醜い片輪もまた、妻子のある四十男と同じやうに、若い、美しい愛人を持つ資格を剝奪されてゐる……。

讀書より他に何の趣味もない、といふのも、自分の片輪を恥るからこそだつた。自分は人に嫌はれる身體だ。誰にも愛されない男だと、自分自身を卑下するうちに、人並な浮世の歡樂からも次第に遠ざかる癖がついてしまつた。

だのに、真理子が出現してから、たとへば霧に蔽はれた街が、あたゝかい日ざしに少しづつ、明るく晴れて行くやうに、小澤の心境も變つて來たらしいのだ。真理子ほど自分をやさしくいたはつてくれる女性に、彼は曾て出會はなかつた。彼女は、自分のやうな醜い男と一緒に街を

平然と歩いてくれる。ほんの一瞬間だつて、片輪の自分を軽蔑するやうな顔いろを見せたことがない、どんな用件だつて、厭な顔一つせず、行届いた親切と共に果してくれる、眞理子によつてはじめて、小澤は、醜い男に對して酷薄でない女性を見た。ほんたうの優しさと、節度のある雄々しさに溢れた女性を知つた。――  
(もしも彼女が俺と結婚してくれるなら、俺は忠實な奴隷のやうに、彼女に仕へてやるんだが……)

本を読むのも忘れて、うつとり考へに耽つてゐる時、女中が入つて来て、

『夕方、こんな小包が参つてゐました、相済みませんでございます、忘れて居りました』  
といひながら、大きな包みを差し出した、差出人は眞理子である。小澤はハツと胸を突かれ、震へる手で小包みの紐を切つた。

果して、小包みの中から現れたのは、先日買つて仕立てさせて、デパートから眞理子に届けさせたあの豪華な呉服類だつた。

生れてはじめて出會つた優しい女性への尊敬のしるしに贈つたつもりだつたのに、眞理子は冷然と突返して來たのだ。こちらの心づくしを嘲笑ふやうに――

尤も、あの、はじめから眞理子への贈物といふことを承知させて買つた銘仙だけは、小包の中に入つてゐない。あれだけは快く受取つて呉れたらしい。せめてそれが小澤には僅かな心慰めだつたが――

(俺の贈り方は、少々だまし打ちの形があつたからな、それを彼女は怒つてゐるのかも知れない)  
と解釋しようとしたが、突返して來た彼女の氣持は決して、そんな生優しいものではないに

違ひない。

(彼女は、俺を金に飽かして彼女の歡心を買はうとしてゐる誘惑者だと誤解してゐるのだ。俺がそんなに卑しい男であらうか。こんなことで彼女を誘惑し切れるなど、高をくゝるほど、俺がおろかな俗物であらうか。眞理子！ それは誤解だ！ おそろしい誤解だ！ なぜ、あなたは俺のまごゝろが分らない？ これほど、あなたの前でへり下つてゐる男を、なぜ、あなた

は……)

この限りも知らぬ寂しい怨み。彼は、彼女にいきなり平手打ちを食はされたかのやうに悲し

その夜は、殆ど眠れなかつた。

翌日、彼はいつもより一時間も早く、日本橋の店に出て行つた。そんなに早くから社長が出て来ようとは思ひがけないので、勿論、店にはまだ一人も社員は出勤してゐなかつた。たつた一人、當番の給仕が、社長室の机の上に新聞と手紙の束をおいてゐる所だつた。

『君、楠見さんは、いつも何時頃に出勤するかね』

と不機嫌に訊くと、給仕の少年は、

『さア、大概九時頃だと思ひますが』

社長自身も、何のためにこんなに早く出て来たのか、實は分らない。たゞ、何となく、一分間でも早く、眞理子の顔を見なければ、安心出来ないやうな気がしたのである。ひよつとしたら、あの小包を送り返すと一緒に、それつきり彼女は店をやめるかも知れない——そんな不

吉な豫感さへする。

いま、このまゝ、こちらに何の辯解をする機会もなく、彼女に店をやめられたら、それこそ「大事だ、一生の悔、一生の心の傷が残るに違ひない……」

三十分もすると、ぼつぼつ社員たちが出勤して来はじめた。九時には、まだもう三十分もあつたが、小澤は次第にいらいらして来た。

たうとう思ひ切つて、眞理子のアパートに電話をかけて見た。

『あたし、楠見でございます』

受話器の底に、はつきり、彼女の聲が響くと、もう半ば度を失つて、

『あゝ、楠見さん、眞理子さん、あなた今日、社を休むんぢやないでせうね』

『はア、あの……』

何やらいひ溢るらしい聲の表情も、いつもと違つて、ひどくよそよそしく聴こえた。

『あなたは、怒つてるんですか』

『いゝえ、別に……』

「楠見さん、待つてゐます。せめてもう一日だけでも出社して下さい、あなたに説明しなければならぬことがある」

何と返事するか、彼は強くびたりと受話器を耳に押しつけた。

「あの……」

彼女は言葉を切つたまゝ、しばらく黙つた。處女の喘ぐやうな呼吸が、受話器の底から溢れ立つて、こちらの耳を打つて來るのが感じられる。

「もし、もし」

沈黙がつゞくので、もしや線が切れたのではないかと不安になつて、小澤は促すやうに、あわてた聲で、

「兎も角、來て下さい。あなたは、飛んでもない誤解をしてるんでせう。少くとも、一度は僕に辯解させる機会を與へて呉れても好いちやありませんか。ね、ね！」

何といふ可哀想な男だらう——小澤は、ふと、自分の哀れな姿を顧みずにはゐられなかつ

た。妻でもなければ、愛人でもない、云はゞ自分の目下にすぎない雇人に向つて、こんなに取纏り懇へてゐる自分は、既に女王に仕へる奴隸のやうに膝まづいてしまつてゐる！

「あたし、今日休ませて頂かうと思つてたのですけれど——お忙しいのでしたら、これから直ぐ、出勤します」

やがて、彼女はいつもの平靜な聲に返つてさういつた。

小澤には、我が耳を疑ふほど嬉しすぎる返事だつたので、

「ほんとですか」

と思はずいつたが、

「ぢや、待つてゐます、なるべく早く、出て來て下さい」

と、事務的な調子でいひ、電話を切つた。

それからの四十分間が、小澤には三時間よりも長い時間だつた。そして、出社して來た彼女を見ると、彼は聲をあげたいほど嬉しかつた。

眞理子は、先日デパートで買った、あの銘仙の對を着てゐるではないか！

『おい、よく似合ふ！ おとなしくて、しかもスマートで、この柄は大成功でしたね、楠見さん』

『あたしには、少しお嬢さんすぎたかも知れませんが』

『そんなことはない、どんな華やかな物を着たつて、あなたに華やかすぎるなど、いふ場合は想像もつかないことです』

『あんなことを——』

と、彼女は笑つた。さういふ會話の間にも、小澤はじつと彼女の顔色を観察したが、別に怒つてゐるやうな容子も見えない、さればとて、これほど聰明な女ゆゑ、怒つてゐるからとて、さうたやすく感情を顔に表はすやうなこともないだらうと思ふと、めつたに安心してしまふ譯にも行かないのだつた。

『楠見さん、あなたは、どうして今日、休まうと思つたの？』

と、先づ小澤はさりげなく訊いた。

『だつて——』

『休む、といふよりは、こんな店に、もう二度と出てやるものか、と決心してゐた、といふのが真相なんでせう』

『だつて、あんなこと、なさるんですもの』

と、眞理子は初めて微笑を引込めた頬を赧くした。

その羞らひを含んだ顔を見ると小澤は急に胸が一杯になつた。さうだ、自分は何もわろいことをした、度を越した贈物などして、この女を當惑させたのだ、そのために彼女は社をやめやうとさへした、忽ち生活難に直面するにも拘らず辭職の決心をするといふことは、彼女にとつてどんなに苦しいことだつたらう、自分が悪かつたのだ、恥づべき男だ、小澤の心は悔で一杯になつた。

『何もいはないで許して下さい。僕がわるかつたのです。もうあんな失禮なことは、決してしません。僕は、あなたに社を辭められるのが一番こはいんだ。分る？ あんなことで、あなたに辭められたら僕は……』

『もう仰言らないで——』

眞理子はやさしく、さへぎつた『あたし、よく分つてゐますの。あなたのお氣持ちは……あたし、決して辭めませんわ。たゞ、あたしが面喰ふやうなことでさへ、なさらなければ——あたしを意固地な女だとお思ひにならないでね』

贈物を突返された時は、頬に平手打ちを食はされたやうな打撃を感じた。その打撃の痛みはしかし、まだ小澤の心に残つたまま、消えない。ひりひりとする痛みを忘れるためには、もつともつと此方の複雑な氣持を説明しなければならぬ。卑しい野心を持つて、あんな度はづれな贈物をしたのではないこと。彼女の虚榮心につけ込んで歡心を買はうとしたのではないこと。そして、自分が決して物質の力で、彼女の純情を動かさうなどとは夢にも考へない男であること、自分は自分がどんな男であるかをよく知つてゐる、だから、彼女に對しては非常にへり下つた氣持ちでゐること、それらのことを、どういふ言葉で説明したら、彼女に分つて貰へるだらう……

『ねえ、僕が卑しい野心で、あんな贈り物をしたのではないことは、あなたも諒解してくれるで

せう。そんな野心を僕が持つとしたら、滑稽ぢやないか。この僕が、どんな男であるかは、僕自身よく知つてゐる。そんな男だから、物質で人の心を釣つて、あはよくば愛情を買はふなどと、さもしい考へを起すんだらうといはれるなら、それまでの話だが、しかしそんな手段で、たとへ誰かの愛情を買ひ得たにしろ、自分の醜いのをよく承知してゐる限り、相手の愛情を信用することは出来ないから、僕は餘計さびしくなるだけでせう。では、何故、あんな贈物をしたか、と訊かれると、ちよつと説明が困難になるが——つまり……』

『もう、どうぞ』

眞理子は切なさうに相手の言葉をさへぎつた。

『あたし、よく分りましたわ。でも、そんなにおつしやると、どうしていゝか分らなくなりませう。あたしだつて、ほかに力になつていたゞく人はないのです。それなのに、折角の御厚意を無にするやうなことをして……あたしこそ、許していただゝかなくちやなりません』

小澤は非常にうれしかつた。『ほかに力になつていたゞく人はないのです』と彼女はいつた。彼女は自分の信頼するといふのだ。さういはれるだけで、幸福だと思つた。

『有難う。そこで、一つ約束して貰ひたいことがある』

『何ですの？』

彼女はまどろいたやうに顔をあげた。

『絶対に、僕をおそれないで欲しい、といふことです、どんな事があつても、僕は妙な野心を持つてあなたに接近してゐるのではないといふことを忘れないで貰ひたいのです。でなければ僕は安心して、あなたにつき合つて行けないからな』

『では、あなたも、もう決してあたしにセンチメンタルな事はいはない、とお約束なすつてね』と、半分冗談のやうに笑つたが、この言葉には、なぜか贈物を突返された時以上に、小澤の心を残酷に打つものがあつた

## 危 機

夜、眞理子がアパートに歸つて見ると、樫本から手紙が來てゐた。

長いこと、御無沙汰したやうに思ひます。あなたから、お手紙貰はないことも、また久しい、去るものは日々とうとしといふが、それが、あなたと僕との間にまで適用されやうとは思ひがけもなかつた。しかし、それ位のことを寂しがるやうでは、大きな覺悟を持つて大陸に渡つて來る資格はないのかも知れないのだから愚痴はいはない。たゞ、どうして近頃のあなたは僕に對して妙によそ／＼しいのか——この前の手紙で、ふとさう感じたのだが、それから一ヶ月ちかく便りを貰はないのだから、余計氣になる。いや、これも、愚痴かな……僕らの愚痴などに、あまりこだはらないで下さい。どんな英雄でも時には體がだるいとか、目ざしでお茶漬が食ひたいとか、今度の上衣の仕立は少し短かすぎたとかいふでせう、そんなことを一々氣にしてゐたら限りがない。

ところで、今日は僕の身の上にしこし變化が生じたことについてお知らせしなければならぬ。實は、軍の方の囑託は、先月限りでやめることになり、武漢銀行の行員として、當分その南京の支店で働くことになりました。不名譽な辭職でなかつたことだけは信じて下さい。



そして、この転職は、銀行が中支經濟建設の上に、永久的な大きな使命を有つてゐるだけに僕にとつては、大陸に渡つて來た目的に、最もよくそふものであることも理解して貰ひたいのです。

そんな譯で、當分、内地の土を踏む望みからは、益々見放されてしまひました。武漢銀行の行員として、中支經濟建設に何程かの努力を奉仕しよう、僕に與へられた永久的な地盤を固守するためには、僕は内地とつながる僕の個人的なあらゆる幸福とおさらばを告げようと思ふ、眞理子さん！たゞ、しかし、僕は、あなたが誰かと結婚する時、祝電を打つ自由と幸福だけは、捨てないつもりです。

あなたに預かつて頂いてゐる荷物の處分を近藤にたのんで置きました。永いこと厄介なものを預つて頂いて、済みませんでした。近いうちに近藤が取りに行つたら、渡してやつて下さい。あなたも今は職業婦人で——どうです、働くのは愉快ですか、しつかり、やつて下さい。

この手紙の中の二つの文句が、眞理子心のを鋭く刺した。

『僕は内地とつながる個人的な幸福を捨てる、が、あなたの結婚式に祝電を打つ幸福だけは捨てない』

この意味は、『お前を妻にする望みを喜んで捨てる』といふのと同じではないか、彼には子までなした過去の女がある、さういふ彼の妻にならうといふ空想は、こちらも、とくに放棄したはずだつたが、それにも拘らず、この文句は眞理子を無限にさびしくした。

そして、もう一つ。

『預けてある財産を近藤に渡して呉れ』

彼女の一番おそれてゐた要求だ。おそかれ早かれ、直面しなければならぬと、かねてから覺悟はきめていたが、たうとうその危機は、目前に迫つて來たのである。

眞理子は立ち上つて、窓のカアテンをしぼつた。

アパートは高臺にあるので、窓から眺める街の夜景は可成り大きい。巨大な灯の海の、あちら此方にネオンが生きものゝやうに瞬いてゐる。そこで、目の前に大きく擴がる春の夜は、い

ろいろの彩りに染め上げられた柔らかな黒縹子のやうにも見えた。

彼女は、じつとそこに立つたまゝ、眺めつづけた。

何百万人の人が、あの灯の海の中で、いかに苦しみ、いかに楽しみ、いかに唄ひ、いかに悶えてゐることだらう、都會の底鳴りは、どこからともなく、この静かな高臺にも響いて聴えるのだつた。

お母さんは、どうしてゐるだらう？ 遠いネオンの瞬きを見詰めながら、ふとさう思った。もし、お母さんに對する責任さへないのでしたら、いつだつてわたしは自殺する。この世の中に何の未練も何の望みもない身體だ、生きることは、わたしにとつてたゞ苦しい。おゝ、もし今すぐ死ぬことが出来るのだつたら――

生れてはじめて都會の姿を見るかのやうな驚きを以つて、彼女はじつと目の前の夜景に見入つた。

いよいよ、榎本に一切を打明けなければならぬ日が來た。あなたの財産は、失くなつてしまつた、焼いてしまつた。――しかし、それで済むことだらうか。けろりとして、そのまゝで此

方の責任を忘れることは――到底、出來さうもない。

勿論、榎本だつて、近藤だつて敢て彼女の責任を追求しはしないだらう、況して、焼いたものを辨償しろ、などゝいふやうな自分たちの仲ではない。仕方がない、過失だ！ 榎本は笑つて諦めるだらう。そして、こんな災難のために、彼女が心を煩はさないやうに、まごころから祈つてもくれるにちがひない、だが、それだからこそ、彼女は打ち明けるのが苦しいのだつた。もしも、眼の色かへて賠償を要求して來るやうな相手だつたなら、どんなに此方も氣が樂であらう、が、相手は榎本なのだ。たとへ誤つて、彼の目だまを指さきで潰すやうな事件が起きたつて、彼は笑つて彼女を許すだらう。それだけに、どうしても――こんなにまで事は切迫してゐるのに矢張り『焼いてしまつた』と打ち明ける勇氣は出て來ない。

打ち明けるのは、恐しかつた。悲しかつた。とても忍び得ない苦痛だつた。

同じ打明けるなら、どうして火事の起つた當座、榎本に手紙を書いて打明けなかつたのだ。ぐづぐづ躊躇してゐるうちに、時を失してしまつた形でもある。せめて近藤にでも、話しておけば好かつたのに――が、そんなことを今更後悔したとて何にならう。

突如として、眞理子は、自分の今立つてゐる所から、窓を乗越えて、あの灯の海へ、生活の渦まく下界へ——身を投げ捨て、しまびたいといふ、鋭い、はつきりした衝動を感じた。へさうだ。わたしは人の大切なものを焼いてしまった。もしかしたら、それが樫本の一生の運命に影響するかも知れない財産を、わたしの手に預りながら、失つてしまった。こんな選りに選つた不幸な災難に會ふほど、わたしは神さまに憎まれ子だつた。よろしい、それほどわたしが人間の屑なのなら——)

死よりも、もつと恐ろしい決意がふと湧き上つたのである。

『むかし、さういふ過失を犯したことはさすがに樫本も、あなたに知られたくないらしいんだ何しろ——』

翌日、豫期した通りに近藤から電話がかゝつて來、眞理子は勤めがひけてから、彼と銀座のコロンバンで落合つたのだつた。

『相手の女があんなろくでなしだから、實際、樫本にとつて、名譽な話ぢやないんだから』

『ほんとにねえ。あんな女の人にいつまでも付き纏はれちや、可哀想だわ、樫本さんが……』

警察の留置所で、それから熱海行の汽車の中で、偶然ながら二度も出會つた樫本のむかしの女の姿を思ひ泛べるたびに、眞理子は樫本の醜い半面を見るやうに暗い氣持になる。

『樫本も、あの女のことを想ひ出すのは苦しいだらうと思つて、あの女が變り果てた姿で現れたことは、知らせてやらなかつたんですが、最近、熱海の宿屋の女中をしてゐるらしいんですが、またもや金がほしいといつて來たので、僕もさう度々は堪らないから、南京の樫本のところへ、知らせてやつたんですよ、あの女が、樫本の子まで生んでゐることは、樫本は今まで知らなかつた。なぜつて、樫本と別れる時には、女さへ妊娠してるとは知らなかつたんですからねで、今度の僕の手紙で、はじめてあの女との間に子供まで出來てゐたのを知つて、樫本は非常に驚いたんですね。一人の女を永い間苦しめ、底知れぬ墮落の路へ追ひやつたのは、みんな自分の罪だ、とそんな風に樫本は考へ始めたらしい、全力を盡して彼女を救はうといふその氣持ちは分るんだが……』

近藤は、そこで、ちよつと苦笑して、

『しかし、あの女も中々食へないからね。第一、櫻本と別れたのもあの女の方がほかに男が出來て、つまり櫻本を捨てたんだし、それに、果して櫻本の子供を生んだかどうかも怪しいもんだと、僕は睨んでるんだ、そんなに大仰に、責任を感じなくても好いと思ふんですが、何しろ櫻本は、あんな生一本の男だから……』

そこまで説明してから、近藤はいよ／＼用件に入つて行つた。

『兎も角、そんな譯で、櫻本は、日本に残してある全財産を、あの頽廢した女に與へたい、といひ出したのです、あなたに預けてあるあの財産を——』

『え？』

眞理子は、見る見る、青ざめた。『あなたの所にも、櫻本から、さういつて來たでせう、僕に處分を任せたと』

『え、』

と、うなづいたが、殆ど放心したやうに元氣がなかつた。

『あの荷物の中味は、二つの小包に分れてゐるといつて來てるんです。一つは、誰にも見せら

れぬ寶ださうで、これは櫻本にとつては生命にも替へられないほど大切だから、誰にも與へられないのだといつてゐる。もう一つの包みは、債券ださうです。櫻本のお母さんが残して行つた唯一の遺産だといふんです。その債券を、全部、あの醜いむかしの女にやつてしまふといふのです』

『債券を？、それは……』

『額面は一萬二千圓ださうだ』

『一萬二千圓？』

『そこで、僕はあなたから、早速にもその荷物を引渡して貰はなければならぬんだが』

永い日あしも漸く衰へて、二階から見おろす鋪道の群衆も、だん／＼街の灯に輝かしく染出され、誰も彼も楽しさうな顔に見える。

(あたしだけが、寒さにふるへてゐる。あたしの心は凍えてゐる！)

しかしながら、その金額が、百萬圓でなくて、僅に一萬二千圓だつたのは、何といふ仕合せ

だらう！僕に——さうだとも、十萬圓と比べてさへ、それは、ほんの目糞ほどの金だ、彼女の月給は今五十圓なのだから、一年で六百圓溜るだらう、そしたら一萬二千圓は何年で溜る？二十年——そんな算術はちつとも悲しくない。けれども二十年後には、この黒い髪は灰色になるこの弾力のある皮膚もたるんで小皺がいかに澤山出来ることだらう、この考へが、一萬二千圓といふ金額を、彼女の前に立ちふさがるキングゴングのやうに巨大に見せるのである。（わづかそれつばかりの金で、一生の流れをせき止められる、そんな運命もある。そしてあたしが、その運命を、今、荷擔つたのだ。ほかの人間ではない、この、あたしなのだ）突如として、昨夜アパートの窓から街の夜景を眺めながら思ひついたあの決意が、眞理子の中に蘇つて來た。

『樫本から預かつてる荷物は、アパートに持つて來てるんですか』

と、近藤は何氣なささうに聞いた。

『それがね』

と、眞理子はあへぐやうに、

『母の手許にあるんですわ。二三日うちに母に會つて、持つて來ますから、それまで、待つて下さいません。』

『なに、そんなに急がなくても好いんですよ。相手はあんな女だ。あんな女に一萬二千圓もやるなんて、樫本の人道主義も、あまりに甘すぎると思ふんです』

『でも——』

と、眞理子は近藤と同じ意見になりたい自分自身の氣持ちと闘ひながら、

『でも、一人の女を墮落させた責任を引受けた樫本さんの態度は立派だと思ひますわ、一萬二千圓もあれば、女は、それを資本にして何とか生活を建て直すことが出來ますものね』

『それも、あの女のやうに自墮落になつては六ヶ敷いだらうね。どんな金だつて、有効に使ふやうな女ぢやありませんよ。ろくでもない男に貢ぐか、競馬に入れ揚げるか——樫本は、だから馬鹿な甘ぢやんだといふんだ』

『いえ、あの方は立派ですわ』

眞理子は、思はず感動をこめていつた。そして、ハツとした。近藤と一緒になつて 樫本を

嗤ふ氣になれない自分が不思議だつたのである。

(ほんとに立派だわ、あの人！男だもの。ふとしたことで、どんな氣紛れな過失を犯すか分らない榎本さんが、若氣のあやまちで、あんな女の人と一緒にたからとて許せないことではない。しかも、あの人は立派に自分の責任を引受けて、持つてる限りの金を投げ出すといふのだ。今まで榎本さんを悪く思つたあたしは、何といふ心の狭い女だつたらう)

彼女は榎本の過失を許す氣持ちになつた。いや、それどころか、彼の立派な態度に感動さへした。いまは、榎本ほど好きな男はないといふ、元の思慕が生き生きと蘇つて來るのを感じたそれなのに今度は自分の方が、榎本にとつて許し難い女にならなければならない、何といふ絶望であらう。

『ちや、一三日うちに、お母さんの所から取つて來ておいて下さい。僕、いつでも、受取りに行きますから』

近藤は椅子から立つて、

『どつかで、御飯を喰べよう。久し振りに會つたんだから』

一三日うちと、一先づこの場をのがれておいて、彼女は賠償の工作をしとげようといふ決心だつた。

(よろしい、あたしはもう、希望も、生命までも投げ出した氣持ちなんだ。死んだ氣でぶつかつて一萬二千圓位のお金が出来ないつて法はないだらう)

眞理子には確信があつた、そこで、銀座の歩道の人の流れに加はりながら、彼女は生き生きといつた。

『ねえ、近藤さん、誰だつて、死んだ氣持ちになれば、相當の仕事が出来ると思はない?』

『急にまた、妙なこといひ出す人だ、氣味がわるいよ……。どうしたの?』  
と近藤は笑つた。

『いえね。あたし、何だか、生きてゐるのが無意味になつて來たのよ。決してセンチメンタルぢやないの。それで、これから少々性格を變へて、世の中であばれてやらうか、などと、時々思ふことがある』

「こはい、こはい。死んだ氣になつて、世の中で暴れまはつたら、何が、いゝことがあるの？」  
「あると思ふわ、きつと」

ふと、涙がこみ上げて來た。一杯のコツプの水が、急に咽喉から口の方へ逆に戻つて來るやうな感じだつた。

(死んだ氣になつて、あたしは小澤氏のものになる！)

それこそ、昨日から、確乎として心中に立てた彼女の『決意』だつた。

好いことは、きつとある！ 第一に、一萬二千圓を賠償することが出来る。そこで、榎本はむかしの過失の責任を支拂ふことが出来る。一人の墮落した女が、生活を建て直すことが出来る。あゝ、何と澤山の『好いこと』があるのだらう。彼女が死んだ氣になつて、小澤氏のものになりさへすれば――

「死んでやる。この生きてゐて何の望みもない身體を、あの氣の毒な小澤氏に與へるのだ！」

おや、もう一つ「好いこと」があつたではないか。跛足の小澤氏に、こんなに若いきれいなブリリアントなお嫁さんが與へられるのだつた。まさに偉大なる慈善だ！

『ホツホツホ』

彼女は急に高々と笑ひ出した。

『今夜はどうかしてるね。腹が減つた。御飯を喰べながら、僕、もう一つ話したい用事があるんだが……』

『つひでに、今、いつておしまひなさいな。なアに、それ。大概、あたし、想像がつくやうな氣がするけれど』

『榎本に關係のない用事ですよ』

『あてゝ見ませうか』

『あてゝごらん』

しかし、眞理子は、急に口をつぐんでしまつた。

二人は、いつか、西銀座の、廣い並木路を歩いてゐた。

『ねえ、あてゝごらん』

さういつて、つと寄りそつて來た近藤の目は、異様に若々しく輝いてゐた。

『恐らく、あなたには分つてゐるだらう』  
近藤はひつそりと呟くやうにいつた。

『榎本についての用談が済んだとすれば、今度は僕の用談に入る順番だ——』  
『近藤はしづかに、しかし底力のある聲でいつた。』

『眞理子さん、僕は、ずっと以前から、あなたと榎本との間がはつきりしなかつたので、今まで遠慮してたんだが……兎も角どこかで、御飯でも喰べながら、ゆつくりお話ししよう、僕は腹が減つた』

プラタナスの樹の下で、ふと近藤は立止つた。銀座も裏通りの並木路だつたので、その邊の街燈は乏しかつたが、彼の眼は暗がりの中で燃えるやうに光つてゐた。

眞理子は、ふと怖ろしくなつて『あたし、お腹は一杯ですから……もう少し歩かない？、歩きながら、お話しませうよ』  
と、哀願するやうにいつた。

彼が、いはうとしてゐることは分つてゐる『僕と結婚しよう！』と、こゝで決定的に、話をつけてしまふ氣なのに違ひない。

眞理子は、近藤が嫌ひではなかつた。もしも、好きな男といふものに等級がつけられるものなら、おそらく近藤は、彼女にとつて榎本に次いで第二番目に好きな男だといつても好いだらう。

が、第一に愛する男を諦めたからとて、第二の幸福を掴むことさへ、眞理子は望んではならなかつた。いや、そんなことは、考へたこともないのだ。寧ろ、それは女の道として淺ましい道であるやうな氣さへする。

『ねえ、近藤さん。榎本さんはどんな氣なんでせうねえ』

と、眞理子は、肉薄して來る近藤をそつと避けるやうに歩きだしながらいつた。

『どんな氣つて——何について？』

『結婚について……つまり、大陸なんか一人で行つて、奥さんもあちらで貰ふのか知ら』

『さア、どうだか——彼奴は、いつかの手紙に、自分のやうに大陸で骨になる覺悟で働いてゐ



るものゝお嫁さんになる人は氣の毒だから、當分、結婚のことなど考へないといつて來てたが——寂しいだらうな』

と、近藤は、ふと暗い顔をした。

『どうして、樫本さんのお嫁さんになる人は氣の毒なの？』

『樫本は何といつても善良な、思ひやりの深い男だからね。自分は信念を以つて大陸で働くんだから好いけれど、良人のために、支那の奥なんかで暮さなければならぬ女は可哀想だといふ譯だらう』

『良人の信念を尊敬する妻だつたら、良人と共に、どんな山奥にだつて、喜んで暮すのが女ぢやないの？』

なぜか、眞理子は、近藤のいつたことを、直接樫本の口から聞かされたやうな氣がして、胸が一杯になつた。

『樫本さんのためなら、鬼の住む島にだつて、喜んでついて行く女は幾らもあるでせうに！』

『そして、僕のために、喜んで東京で暮して呉れる女は、一人もないといふの？』

『……………』

『眞理子さん、僕の氣持が分らないの』

『あゝ、あたし、何だか泣きたくなつた。近藤さん、あたし、あなたが嫌ひぢやないんです、でも…………』

そして、近藤が驚いて引留めるのも振拂ふやうにして、彼女はタクシーに乗つた。

アパートに歸りつくと、眞理子は疊の上に身を投げ出して、聲を立てゝ泣いた。

左様なら、樫本さん！

あなたは、御自分の苦難を、どうして愛する者に頷ち與へるのを惜しむのだ。支那がどんなに住みにくい所であらうとも、あなたと一緒に暮すのなら、あなたを愛するわたしには、少しも苦しいことではなかつたのに。

あなたは、わたしを愛してゐたのに違ひない。それなのに、わたしに何の求愛らしい言葉もそぶりさへも見せなかつた。わたしに大陸の苦勞をさせたくないためだつたのだ。そんなにも

わたしを深くいたはり、いつくしんで、そして、たうとう今は、何を望んでも及ばぬ事情に立  
到つてしまつた。

左様なら！永久に、左様なら！

わたしだつて、どんなに深く、あなたを愛してゐたらう。あなたに、暗い過去があつたと知  
つて、死ぬばかり驚いたが、それも、あなたを愛する故に、今のわたしはもう問題にも何にも  
してはゐない。あなたが、たとへ過去におそろしい殺人を犯したといつたつて、わたしは、あ  
なたを許すであらう、愛とは、地球上のあらゆる人から指弾される相手を、自分ひとりも敢然  
として許すものなのだ、さういふ力なのだ、あなたに對して、わたしに、それだけの力は有餘  
るほどあつた、今もある——だが、もう遅い、もうどうにもならない。別れの瞬間が來てしま  
つたのだ。

あなたの過去の女は、あのやうに墮落してゐる、あのやうに、みじめに頽廢してゐる、あな  
たは、あの女を物質で救はうとしてゐる。果して彼女が物質で救はれるかどうか、わたしは知  
らない、けれども、あの女にとつて物質が現在何よりも必要なのは、わたしがこの目であの女  
を見てよく知つてゐる。

あなたは、樫本よ、あの女を救はなければならない。それが、責任を知つてゐる男のなすべ  
き事である。そのあなたの立派な行動をわたしは妨げてはならぬ。

左様なら、樫本さん、愛する、愛する樫本さん！

あなたのお金を預つてゐて、それを失くしたとは、だからわたしはいへないのだ、いへば、  
あなたはその女にお金をやることが出来なくなる、あなたは、わたしを許すかほりに、あの女  
を救ふことを諦めなければならぬだらう、だからわたしは——あなたの、あの女を救ふとい  
ふ行動を妨げてはならない、わたしは、この舌を噛み切つてでも、あなたのお金を失くしたと  
はいへないのだ。

樫本さん。

あなたの一萬二千圓は、わたしの責任である、荷物の中の、ほかのもう一つの寶物について  
は——もう暫く待つて下さい、しかし、今、さしずめあなたに必要な一萬二千圓だけは、立派  
に調べて、近藤さんの手に渡すでせう。

左様なら！

いつか、また、晴れやかな日が訪れて、あなたは、わたしの気持ちを理解し、可哀想だった  
と、いつて呉れるであらう。可哀想だった！ しかし、しかし……哀れんで貰ひたくはない。

この女を。この、お金のために心ならぬ結婚を決意した汚れ果てた女を——

わたしは、わづか一萬二千圓のお金を拵へるために、醜い中年の跛足の男と結婚しようとする、見下げ果てた貞操の賣り手だ。

そこまで考へて、眞理子はもう一度、ワツと聲を上げて泣いた。幾らでも泣かう。誰も見てゐるものはないのだから。

### 悲しき幸福

いひつけられた得意先きへの手紙の文案を書いて、小澤氏にしめすと、別に訂正の個所もなかつたので、眞理子はすぐ階下のタイピストに渡した。

それが、その日の最後の用事だった。

『少し早い、もう用事はないから、帰つても好いですよ』

『はア、有難う』

しかし、別に歸り支度をするでもなく、彼女は自分の机に坐つて映畫雑誌を見てゐた。グラフィアの多い、大版の雑誌を目のさきに、顔をかくすやうに擴げてゐると小澤氏がいつた。

『映畫は、あなたも好きらしいな。僕は、永く見ないが——』

『ごらんになると好いわ、いま、帝劇は名畫週間です。といふあたしも、永いこと映畫館にも参りませんけれど』

『だから、今日でも行つて來たらどうです。いつも忙しい目をさせて、氣の毒です』

『えー』

と、案外氣のない返事だったが、見てゐた雑誌を、ばたんと机の上に置くと

『あなたも、いらつしやいませんか？』

と、急に元氣にいつた。

小澤はどきつとしたやうに顔を輝かせて、

「僕も？」

思ひがけない光榮を不思議がらずにゐられなかつた。

彼は、今日はすこし事務も早く切り上げて、芝の親戚の家に見舞に訪れる豫定でゐた。その家の娘が、永いこと病床にゐるのだ。今晚訪れると、今朝家を出る時に電話までしてあるのだつた。

『いらつしやいませんか？「ミモザ館」つてフランス映畫が久し振りに出てゐますわ』

『あなたが行くのなら——お伴させて貰ふかな』

一瞬にして、親戚を訪れる望みは放棄したが、それでも、あゝはいつても、一緒に行つては彼女は内心迷惑なのではないかと思ひためらつて、

『本當に好いんですか』

と念を押さずにゐられなかつた。

『伴れて行つて下さると嬉しいわ』

小澤はそれと聞くと、もう楽しさで一杯になつて、

『さう、ちや、早速、出掛けませう』

と、いそいそと外出の支度を始めた。かうして、そんなに熱心に俺を誘ふのかと、自分に訊いて見るのも、明るい胸騒ぎの中で、あつた、この孤獨な男を、機會がある度びに、慰めいたはらうとする友情が、本當に彼女の心の中にあるのだ、と解釋せざるを得なくなり、それにしても、そんな美しい友情に何を以て報いたら好いのだらうと考へると、その報い方を考へるだけでも、自分の新しい生甲斐は出来たやうな氣がした。

自動車で、外に出た。日本橋の或る洋食店で簡単に夕食を済ますと、すぐ帝劇に向つた。

今日も彼女は、醜い小澤氏と一緒にゐるのを、少しも世間に愧ぢるやうな態度を見せなかつた。

いや、それどころではない。帝劇の大玄關の石段を上る時などは、まるで妹か妻かのやうな親しさと馴々しさをこめて寄りそひ、跣足の相手を扶けながら歩くといふ様子だつた。常にも増した親密の情が、寄りそつた脇腹のあたりから暖かく沁み込んで来るやうな氣がして小澤に

は、それが嬉しいといふより、寧ろ悲しいほど、幸福だった。

『どうしたの、頭でも痛いんですか』

二階の同伴席に落着いて、しばらくするうちに眞理子はハンカチで頭を押へたまゝうつむいたので、小澤は心配さうに訊いた。スクリーンは「ミモザ館」の悲劇的なクライマックスに將に入らうとする所であつた。

『え、少し気分がわるいものですから』

と細々と答へるので、小澤はいよ／＼不安になつて、

『外に出ませうか。こゝは、空気が悪い』

『いゝえ、大したことはないんです。もう直ぐ終わりますから、見てしまひませう』

この映畫は、彼らが入つた時には、すでに三分の一位映寫を終つたところだったので、映畫を見馴れぬ小澤には、よく筋が分らなかつたが、どうやら四十女の義理の息子に對する愛情を取扱つたものらしい。

場面はクライマックスに入つたやうで、漸死の息子は、今、戀しい女の名を呼びつづけてゐるのである。

『ほんとに大丈夫？ すいぶん混んで、蒸し暑いから……外に出たらすぐ癒るでせう。出ませうか』

『もう、今、終るところですわ』

映寫幕には、今まさに息を引取らうとする息子の顔が大きく映つてゐた。

戀しい女の名を呼んで、接吻してくれと、おぼろな意識の中で哀願してゐる。

義理の母親は、可哀想な息子の最後の願ひを聞いて、激しい絶望に陥る。母はこれほど、お前のために苦しみ、お前を愛したのに、お前が最後に渴望し求めるものは、この母親の愛情ではなくて、あの悪い女の接吻だつたのか——息も絶え絶えに哀願する息子の大映しに替つて、絶望に氣も狂亂した母親の横顔が観客の眼に痛々しく迫つて來た。

突如として、義理の母親は、可愛い息子の切ない願ひを容れてやらうと決意する。息子は、義理の母親を戀人と思ひ込んで、その手に抱かれながら死んで行くのだ。

この死が、悲劇なのではない。悲劇は、この死の次ぎの瞬間に、嵐の如く荒れ狂ふ母親の心の中にあつたのだ。突如として目醒めた義理の息子に對する不思議な愛情——

『出ませう！』

小澤は腹立たしくいふと、すつと立上つた。

『怪しからん母親ですよ』

眞理子と肩を並べて、劇場の廊下に出ると、小澤は、あたりの人たちが、この奇妙な一組に物珍しさうな眼を投げるのにも気がつかず、半分冗談めかしていつた。

眞理子は黙つて、彼に寄りそひながら、階段をおりた。

『あんな母親が澤山ゐるフランスといふ國は、いまに滅びます』

『さうちやなくて、あんな母親の氣持を表はして見たがるやうな藝術家が、フランスには澤山あるから、いけないと仰言りたいのでせう』

それだけいふのも、苦しさうだつた。

『しかし、面白かつた？』

『え、とても』

『あなたが、あんな映畫に興味を持たれるとは思ひ掛けもなかつた！』

『どうして？』

『戀愛だの、愛情だのといふ問題が、この世の中では、それほど大切なのでせうか』

『大切だと思ひますわ』

『ふむ。——戀愛や愛情の問題から閉め出しを食つてゐる僕は、或は偏屈かも知れないが』

と小澤はふと元氣を失つたやうにいつた。

劇場の外に出て、冷めたい空氣にふれると、眞理子もだいたい元氣を回復したやうに見えた。

『どこかで、冷たい物でも飲みませうか、喉がかはいたでせう』

と、小澤はいたはるやうに誘つたが、ほんとうは、いつまでも眞理子と一諸にかうして歩いてゐたいのだつた。帝劇から日比谷の方へ歩きながら小澤は、春の夜の爽やかさといふものを、こんなに嬉しく味はつたのは生れてはじめてだと思つた。

すこと、眞理子が思ひ掛けないことをいつた。

『あたし、お酒つてものが飲んでみたくなりましたわ』

『お酒をッ』

小澤はびつくりした。

『あなたはお酒を飲むんですか』

半ば答めるやうに訊いた。

眞理子はたゞ苦しうに笑つただけで、黙つてゐた。

銀座の裏に、ドイツ人の経営してゐる小ぢんまりした清潔な洋食店がある。食事時間が過ぎても、ビールや、ちよつとした酒類を飲みに来る客でなか／＼繁昌してゐる店だつた。小澤も以前丸の内に勤めてゐる頃は、度々そこにビールを飲みに行つたものだ、それを思ひ出して、  
『ちや、ビールでも飲んでごらんさい、少し位なら、疲れた時には却つて好いかも知れない』

小澤は、眞理子をつれて人の中に出るよりも、いつまでも、しんみりと二人で歩いてゐたい

といふ望みを諦めて、タクシーに乗つた。

『しかし、矢張り、あなたには、お酒は飲ませたくないな』

いよくテーブルについて、ビールは注文したが、小澤は心からさういつた。たとへビールにしろ、お酒で顔を赤くした眞理子など見たくないと思ふのだ。さういふことは、しんにこの女として似合はしくないことだ。

『それとも、あなたは、お酒が好きなんですか、好きなのなら仕方がないが……』

『好きか嫌ひか、自分でも分りませんわ、まだ、飲んだこともないんですもの』

『ちやア、お止しなさい』

制服めいた洋服にエプロンをかけた給仕女が、ビールの瓶を運んで来て、眞理子の前のコップにつがうとするのを、小澤は手で制止した。

『好いんだよ、つがなくても』

『頂くわ、あたし、ついで頂戴』

眞理子は反抗するやうにいつた。

給仕女は困つた顔をしたが、結局、眞理子にせがまれて、彼女のコップに、黄色い液體を満して行つた。それを一口、おそれもなく飲んだが、すぐ眉をしかめて、

『にがいわ。あたし、にがくないお酒が頂きたいわ』

『あまいお酒は、悪く酔ひますよ』

と小澤はあきれた顔だつた。

『あまいのも厭です、あまくも、にがくもない洋酒を——』

『どうしたんです、今夜は、すこし變だ、あなたは——』

『あたしは酔ひたいんです、酔はせて下さい』

彼女は、にこりともせずにいつた。

『よし、それほどいふのなら』

小澤は手をあげて女給を呼ぶとジンフィズを命じた。これなら先づ酔つたところで大したことはあるまいと考へたのだ。

大きなコップに満されて、ジンフィズが運ばれると、眞理子はいきなり半分ちかくも飲んでしまつた。

『おうらま。』

小澤は、常軌を逸した今宵の彼女には、何か祕密な原因があるに違ひないと思ひ始め、しばらく彼女に思ひのまゝ振舞はせて見ようと心にきめながら、じつと相手の様子を覗ひながら訊いた。

『とても、をいしい。これ、何てお酒ですの？』

『ジンフィズ』

『あたし、大好き』

『ちや、もう一杯、どうぞ』

が、まだ、やつと半分、飲んだばかりだ、それだけは、一息に、うまさうに飲んだのだが、あとの半分は、いかにもまづさうに、十五分間もかゝつて、まだコップの底には、紅櫻桃をひたしながら飲み切れぬ酒が残つてゐた。



(決して、すきで飲んでゐるのではない)

小澤はさう観察した。

『もう一つ、頂いても好い?』

しかし、彼女は、コップの底の最後の一口を飲み終ると、さう元氣さうにいつて笑つた。

『どうぞ』

二杯目は、割合に早く飲んでしまつた。小澤は悲しくなつた。どんな祕密がこの女にあるのだらう。何故、突然、こんな狂態を見せはじめたのだ? どんな苦しみがあつて、こんなにも無理な真似をしなければならぬのだらう。

『もう一杯……』

『まだ?』

『まだ——幾らでも』

といふだけが、せい一杯の、苦しさうな息づかひに、小澤はどきつとしたが、その瞬間に、彼女はがくりと首をたれた。

酔つて赤くなつてゐるはずの彼女の顔は、眞青だつた。

『苦しくない?』

小澤が、いふにいはれぬ痛ましい場面の中に卷込まれた気持ちで訊くと、彼女は、

『外に出ませう』

と、喘ぎ喘ぎいつた。

飲ませるんぢやなかつた。喧嘩をしてゐても、とめるべきだつた。さういふ悔で、居ても立つてもゐられなくなつて、小澤は急いで勘定をすませると、先に立つて外に出た。彼女の身體を支へてやりたかつたが、ほかの客たちにそんな所を見られたら、眞理子は餘計に困るだらうと思ひ、わざと冷やかに、眞理子の方は見向きもしないで外に出た。

しかし、一步、扉の外に出ると、びたりと立止り、あとから、よろめくやうに出て來た眞理子を抱くやうに迎へてやつた。

『苦しいの?』

眞理子は、小澤の肩に額をのせた。

「あたし、とても歩けません」

「それごらん」

すぐ其處が、タクシ一の駐車場だつた。小澤は重い大きな荷物を、横さまに抱へるやうにして彼女を車の中に運び込んだ。

「眞理子さん」

と呼んだが、彼女は小澤の膝の上に死んだやうになつて凭れたまゝ、今は答へる勇氣もないやうだつた。

このまゝ打棄るわけには行かない。介抱してやるためには——自分の家に連れて行くほかはないと思ひ、小澤は運轉手に行先きを告げた。

### 追ひ詰められて

ふと眼がさめた——

こゝはどこだらうと、ちらと頭に来ると、眞理子は思はず半身を持ち上げて、見馴れぬベツドの上に横たはつてゐるのを知つた。

忽ち、何も彼も、思ひ出した。

こゝは、小澤氏の家の二階の寢室なのだ。壁に、大きな額縁にはめた油繪の風景畫がある。その繪の下の飾棚には、五六冊の洋書が立てかけてあつて、大理石の古風な置時計は二時十五分を指してゐた。

「二時十五分！　ちや、まだ幾らも眠つちやゐないわ」

眞理子は思はず咳いた。お酒のあと、生れて始めて経験したやうな激しい頭痛と、悪感と、嘔氣とで正態もなく小澤氏に凭れかゝつたまゝ、この家に運び込まれたのだつた。そして、女中たちにいたはられるのも恥づかしい思ひでこの寢室に入つたと思ふと、すぐ眠つてしまつたらしいのだが、寢臺にもぐり込む時、ちらと眺めた置時計が十一時すこし前を示してゐたのを眞理子は不思議に、はつきりおぼえてゐるのだ。

それにしても、昨夜は、我ながら醜態だつた。あらゆる美しい希望を失つて、世も終りのや

うな悲しみに、つひ、あられもない振舞をしたのだが、そんなことで、悲しみが消えるどころか、一層にがいものが、心の底に溜るだけだった。

明日、小澤氏に、顔を合はせるのさへ、つらい、羞づかしいことである。

ほんとは、酔つたまぎれに、自分の運命を急轉直下、奈落の底に投げようとしたのだ。小澤氏に、この身を捧げようとしたのだ。自らを汚辱の泥にまみれさせることが、ふつうの状態で出来るはずはない、だのに――

そこまで考へて、彼女は全身クワツとなるほどの羞恥に蔽はれた。

小澤氏は紳士だった。やけつ鉢で酒などに酔つて、正態を失つた女の際に乗じようなど、いふことはしない人だった。それだから、彼女は救はれた――

が、果して、ほんとに救はれたであらうか。樫本に返さなければならぬ金はどうなる？ 小澤氏が、彼女を潔白のままに残しておいてくれて、彼女は果して救はれたであらうか。

（わたしは、汚濁にまみれなくては、救はれないのだ。それほど不幸などたん場に、追ひ詰められてしまつたのだ！）

實に、實に、號泣しても足りない哀れな身の上だと苦つた。

眞理子は考へれば考へるほど苦しくなるので、思ひ切つて眠つてしまひたかつた。毛布を額ちかくまで引張り上げて眼をつぶつたけれど、心はいよ／＼冴えて眠れさうにもない。心、といふよりは、神経が突りすぎてゐるのかも知れない。不思議に頭がはつきりしてゐるやうで、しかも、微かな鈍痛が、腦の底につゞいてゐる。

枕もとの小卓の上のランプの光も、黄色つぼい感じで、ふと額に手をやると、たしかに熱がある！

と、その瞬間、扉を、遠慮ぶかく、こつ／＼と叩く音がした。

眞理子は、ハツとしてベッドの上に起き上つたが――くら／＼つとして、そのまま寝てしまひたかつたが

『誰方？』

と、小さい、底力のある聲をかけた。

扉の外には聞えなかつたらしい。もう一度、あたりを憚るやうに、コッコツと、扉を叩く音

は聴えた。

眞理子よりも、小澤の方が、もつと苦しんでゐる、といつても決して誇張ではないのである。

今夜の眞理子の行動は、彼の心を掻き亂した。帝劇に入つて行く時から、いつもよりずつと馴々しかつた、飲めもしない癖にお酒さへ飲んだ。さうして、酔つて苦しがつて、歸りの自動車の中では彼の膝の上に身を投げ掛けるやうにして……いや、そんなことは、まだまだ驚くには當らない。小澤の心を何よりも激しく掻き亂したのは、今宵の彼女が、徹頭徹尾、觸ればすぐにも溶けさうな、甘い柔らかな媚態に溢れてゐたことなのだ。

誘ふ水あらば——今まで、曾て彼女が、そんな素振りを見せたことがあるだらうか、斷じてない。では、なぜ今宵に限つて、あんな態度を見せたのであらう……

(ひよつとしたら、俺の誘ふのを待つたのぢやないか)

ちらと靈感のやうに頭に閃いたが、それと共に怪しく血の躍る、自分が我ながら恥づかしくて

(飛んだ自惚れだ！)

と、頭を振つて忘れようとした。

酔つて、半ば意識を失ひさうになつてゐる眞理子を家に連れて歸ると、女中に任せて二階の寢室に案内させたが、小澤は自分の和室に敷かせた寢床の上に、たゞ上衣を脱いだゞけの洋服のまゝ、仰向けに寝ころび、一時間も二時間も、七轉八倒したのだつた。

(俺は、どう自惚れて見たつて、女に厚意を持たれるやうな種類の男ではない)

さう自分自身に、噛んで含めるやうに教へるほかに、湧き立つ思ひを鎮める方法はないのだつた。

(だが——)

小澤は苦しきまぎれに、自分に有利なやうに考へ始めてゐた。

(だが——眞理子は聡明で、そして敏感な女だ。精神的な女なのだ。聡明で、精神的な女は、必ずしも男の容貌や姿にばかり惚れるとは限らないではないか。俺は醜い男だが、しかし、敏感な眞理子は俺の精神的な何かに、美しいものを見出したのかも知れない。これは十分に有り

得ることだ！)

混沌たる思ひの中に、一とすじほのくゝと希望の明りがさして来るやうな気がした。

あゝ、もし、本當に彼女が、今宵、自分の誘ふのを待つてゐたのなら！折角、美しい情熱に燃えて待つてゐるのに、こちらが知らぬ振りして、相手の好意に何も報いないといふことは、何といふ失禮であらう。

女よ、お前は傷つきやすく、痛みやすい弱い花びらだ、お前が心おのゝきながら、求めてゐるものを、もし與へなかつたなら、お前の受ける侮辱はあまりに大きいではないか——

(が、それも、俺の虫のいゝ理窟のこぢ付けに過ぎない)

それは邪念だ、邪念は拂ひ捨てなければならぬ、さうは思つたが——

眞夜中だ。

彼はもう、自分は氣ちがひになつてしまつたと思つた。そして、絶望的に起き上ると、早鐘のやうに鳴る胸を押さへ押さへ、そつと二階にのぼつて行つた。

そして、彼女の寢室の扉を叩いた。兩脚がぶるぶる震へた。もう一度叩いたが、同時に、そ

の場から逃げ出してしまひたいやうな衝動に襲はれた。

『こんな夜中に、失敬だとは思つたんですが、もしも病氣がひどくなつてゐるんぢやないかと急に心配になつたものだから』

寢室に迎え入れられて、小澤は初めて、自分の行動が異常だつたのに氣がついて、その瞬間身體ちゆうが冷汗になつた。

そつと扉を叩いて、もし返事がなかつたら、そつとまた階段をおりて行くつもりだつた。一度叩いて返事がなかつたので、そのまゝ諦めたら好いものを、つひ二度叩き、中から、どうぞといぶかるやうな聲が聴えたものだから、意を決して闖入したものゝ、自分の野蠻には、我ながら愛想がつきて、相手に眼を注ぐのも恐しいほどだつた。

眞理子が、寢床の上に起き直らうとするのを、あわてゝ制して、  
『どうぞ、そのまゝに——直ぐ失禮するんだから』

と、枕もとの腰掛けに席を取つたが、来るのではなかつたといふ後悔で消え入りたい思ひな

のだ。

『少し熱が出て来たやうですの』

『熱が？ それはいけない、風邪ですね、朝になつたら、早速、お醫者を呼ばせませう』

『いえ、それほど事ぢやないんです』

と、眞理子は強ひて微笑した。

『今まで、ずつと眠れなかつたんですか』

『いゝえ、三十分ほど前から、ひよいと眼が醒めて……』

『ぢや、僕が起こしたつて譯ぢやないんですね。もしさうだつたら大變わるかつたんだが』

眞理子は、それには答へないで反問した。

『あなたは、ずつとお寝みにならなかつたの？』

『ずつと、起きてゐました』

『何か、お仕事——本でもお讀みになつたの？』

『いや、考へ事してたんです』

といつたが、ふと氣がついたやうに

『僕が、どんな考へごとをしてたか、分りますか？』

と、沈んだ聲で訊いた。

『いゝえ、何か面白い空想でも——』

『面白い空想、そんなのは禁止されてる僕ですよ。が、實は、今夜はあなたのことについて、今までいろ／＼考へつゞけてゐたんですよ』

『まア、あたしのことを！、あたしの、何をお考へになりましたの？』

『楠見さん、あなたは どうして今夜はお酒など飲んだんです、どういふ譯で無理に、あんな、いつもに合似はない眞似をしたんです、僕は不思議でならなかつた、あなたには、何か人にはいふにいはれぬ苦しいことがあるのではないかと——そんな氣がし始めると居ても立つてもゐられなくなつたのです、こんなに夜おそく、寢室を襲つた僕を誤解しないで下さい。何か祕密な悶えがあなたにはある。さう考へるだけで僕は眠れなくなつてしまつた、そして……』

窓の外には、もう夜明けがほの／＼と迫つてゐた。小澤はそこまで熱情をこめて言葉をつゞ

けたが、急に自分ながらいひすぎたのに気がついたやうに黙つてしまつた。

『さうですわ。人にはいへない苦しいことで、あたしはいま一杯なのですわ』

『僕に、打明けることは出来ないの？』

『いゝえ、あなたにだけ、聞いて頂きたい苦しみなんです』

いふと等しく、眞理子はハンカチで顔をおほつてしまつた。

『僕にだけ聞いて貰ひたい苦しみ？』

小澤はしんがら驚いて、相手の言葉を繰返して、半ば椅子から立ちながら、

『それは、どんなことなの？』

と、眞理子のハンカチで蔽つた顔の上に屈み込むやうにしていつた。囁くやうな、低い、しかし力のこもつた聲が、かすかにふるへを帯びてゐた』

『小澤さん』

と、眞理子もかすれたやうな聲になつて、

『あたしね——』

『ふむ』

と促されて、餘計にいひ難くなつたやうに、暫く黙つてゐたが、

『あたし、あなたに……』

また、いひ淀んでしまつた。何をいひ出すつもりだらう？ 小澤は恐しい危険が迫つて來たかのやうにすつかり青ざめながら、

『僕に』

と、唾を一つ、ぐつと呑んで。

『僕に……怒つてゐることがある？』

いゝえ、いゝえと、ハンカチの下で、眞理子は激しく首を横にふつた。

『ちや、何なの？ 僕の店には、もう勤めたくないといふんぢやないでせうね』

『違います、全然ちがひます、たゞ……あゝ、もう許して下さい！ あたし、とてもいへませ  
ん』

『いつて下さい。いつて下さい!』

と、小澤は突如として突き上げられたやうに激しい調子になつた。

『恥づかしがることは何もない。いつて下さい、心にあることは、何も彼もいつて下さい。僕をべしやんこにするやうな言葉だつて、あなたの口から聞くことなら僕は嬉しいんだ。もし、いひたいことがありながら、遠慮してはいはないといふのなら、僕は怨みます』

『小澤さん、あたし、あなたに愛して頂きたいのです!』

『勿論、僕は……』

と、激情に卷込まれるやうに、小澤も叫んだが、忽ち、電撃を受けたやうに其場に硬直してしまつた。

『……………』

何かいはうとしたが、唇がふるへて何もいへなかつた。全身は、わな／＼と震へ、一時に瘦せ衰へたやうな、不思議な疲労が彼を襲つた。

(俺は幸福だ!)

夢ではないのか。ほんたうの現実なのであらうか。これが——この朝明けに、この俺が、このやうに美しい少女から、愛の言葉を囁かれた。これが有り得る現実であらうか。

『僕は、僕は、とうの昔から、あなたを愛してゐた!』

彼は、ぐつたり椅子に腰をおろしながら、殆ど自分自身にも聞き取れぬほどの、低い沈んだ聲でいつた。

『眞理子さん』

しかし、彼女は寢床の中にもぐり込むやうにして顔をかくしたまま、身動きもしなかつた。

突然、いつたん退いてゐた血潮が、小澤の全身に漲り返つて來た。はじめて愛されたことを確實に知つた男の歡喜の潮に突き上げられて、

『眞理子さん。今、僕が、あなたに誓へることは、僕たちは必ず結婚しようといふことです。僕を信じて下さい。あなたの幸福のために、僕は、これからの半生を捧げます』

眞理子は身動きもしなかつた。小澤は、思ひ切つて接吻してやらうかと、ちよつと心が動いたが、そのまま部屋を出て行つた。



## 男の意地

眞理子の母の松代は、あれからすつと、なす事もなく、中原の家の離れに暮らしてゐた。かうして母親を俘にしておけば、いつかは眞理子が屈服して来るだらうといふ、中原の氣ながな策戦も、どうやら失敗に終つたらしいのである。

しかし、中原にして見れば、眞理子のごとは殆ど諦めてゐるので、別に、氣ながな策戦で松代を世話してゐる譯でもなかつたのかも知れない、あんな、みつともない形で眞理子に逃げられたのだから、男の虚榮心からいつてもおいそれと松代を追ひ出すやうな、見えすいた事も出来なかつたに相違ない。小澤が、松代を受取りに來たからとて、おとなしく引渡すことの出来なかつたのも、一種の意地からであつたらう。

いづれにしても、今は松代が、中原にとつて、迷惑な重荷になりかゝつてゐるのは、鈍感な松代自身にも、分りはじめてゐた。

露骨に、出て行けよがしにもしないけれど、中原の態度は目立つて冷淡になつてゐた。たゞ、中原の子の、みち子だけが、松代に日に日に馴れ親しんでゐる。

『おばアさま、お手紙です』

日曜日の朝、みち子が離れに走り込んで、一通の封書を松代に渡した。娘からの手紙かと、松代は胸を躍らせたが差出し人は『小澤十吉』とあつて、まだ逢つたこともない人の名である。

封を切つて讀む傍らに、みち子はきちんと坐つて、トラムプを並べながら、

『ねえ、おばアさま、そのお手紙に、眞理子姉さまのこと書いてある?』

『書いてあるけれど……』

『眞理子姉さま、いま、どこにいらつしやるの?』

『……』

『いつ歸つてらつしやるのか知ら』

子供に相手になつてはゐられなかつた。手紙には大變なことが書いてある!

……左様の次第にて、令嬢には小生の秘書として働かれ居り候。しかるに、小生ら五の境遇

に深く同情いたすに至り、昨日、遂に婚約仕り候

松代にとつては、正に落雷を浴びた思ひだつた。

『あたし、眞理子姉さまに、逢ひたいわ、もう歸つていらつしやらないのか知ら』

『もう歸つて來ないかも知れないよ、あの不孝ものは！』

と思はず腹立たしさうにいふ松代の顔を、みち子はびつくりして見上げて、

『あら、どうして眞理子姉さまが不孝ものなの？ だつて、親不孝は、いけない子のすること  
でせう？』

うるさい、と叱りかねないほどの無頓着を露骨に子供の方に見せながら、松代は手紙を読み  
つけた。

されど、婚約致すには、あなた様の御同意を要することは勿論に御座候。我ら向後、心を併  
せて孝養専ら相勤むべくお誓ひ申上げ候。何卒、小生を御信頼下され度候。御許しを得候上  
は、直ちに結婚仕るべき所存に有之……

そこまで讀んだ時、廊下の躑足が近づいて、中原が部屋に入つて來た。

中原が入つて來ると、松代は讀んでゐた手紙を、あわてゝ匿くすやうな形をした。

『何ですか、その手紙は？』

中原は素早く見咎めて手を差伸ばし、

『お見せなさい』

といつた。

『あなたに關係のない手紙です』

『封の上から見たんですが、小澤といふ男から來た手紙なのは知つてゐます。あなたとどうい

ふ關係のある男か知らないが、私の所へあなたを引渡してくれといつて來たことがある』

と、中原は、にやりとした。

『小澤といふ人は、どんな人ですか。あなた、御存じなんですか』

娘と結婚するといふ男がどんな人物であるか、松代は何よりも早くそれが知りたかつた。

『片輪ですよ、ひどい跛足です』

『跛足。』

そんな片輪と、眞理子は何故結婚する氣になつたのか——ぐつと心を打つて来るものがあつて松代は思はず悲しさうな表情になつた。

『兎も角、その手紙をお見せなさい、あの跛足が、何をいつて來たのです』

『堪忍して下さい、あなたに關係のないことをいつて來たんですから』

『その男は、きつと、あなたを誘ひ出さうとしてるんでせう』

『ちがひます、でも、わたしは、是非ともこの小澤といふ人に會はなければならなくなりました』

松代は、本當に、小澤に會つて見たくなつた。そして、出来ることなら、娘が、片輪ものなと、結婚するのを差止めたいと思ふのだつた。

かうして中原の家に厄介になつて居れば、いつれ最後には娘も我を折つて、こゝに戻つて來るだらうといふ望みも、今は消え失せさうになつてしまつた。片輪ものと結婚してでも、娘はこの家にはもう歸らない覺悟を決めてゐるのだ。よく／＼の事だらうと考へない譯に行かなく

なつたのだ。

へわたしが悪かつたのだ。わたしさへお前のいふことを聞いて、早くこの家から出て行つたら、お前はそんな厭な男と結婚しようなどいふ、情ない考へは起さなくて済んだであらう……さう思ふと、一時も早く、娘のところへ馳せつけて詫りたくなつて來たのである。

そこで、なまなか隠し立てして中原を怒らせるより、本當のこと打明けて、中原の諒解を得て、美しくこの家を出た方がいゝのではないかと、ふと思ひついた。

『永いこと御厄介になりましたが、どうやら眞理子も歸つて來さうもありませんから、わたしだん／＼居づらくなつて……』

『突然、妙なことを仰言いますね、こゝを出て行きたい、といひたさうな口吻に聞えますが何かお氣に入らないことでもあるんですか』

と、わざとやさしく、しかし十分に皮肉のこもつた調子で中原はいつた。

『さういふ譯ぢやないんです。實は、放つておくと、眞理子は、その跛足だといふ小澤さんと結婚しさうなので——』

『小澤と結婚する。』

中原の顔いろは、見る見る變つた。

『分つた。眞理子さんが、その男と結婚するといふので、あなたはこの男の所へ頼つて行かうといふんだな。人を踏みつけるにも程がある』

中原は、つと肩を聳かした。

『人を踏みつけるにも、程がある！』

中原は、松代をぎよつとさせるほど、鋭い聲でさう繰返しておいて、

『眞理子は必ずあなたに上げますと、あんなに巧いこといつて私を喜ばせておいて、今になつて私から逃げ出して行くとは——あなた方親子は、恐ろしい嘘つきだ』

『……………』

この思ひ掛けもない、いひがりに、松代はすっかり度を失つて、たゞもう醜い小鳥のやうに怯えすくむばかりだつた。

『わたしを嘘つきですつて。』

彼女はふるへながら、しかし無法な糺弾に懸命に反撥する氣配を見せずにはゐられなかつた。

『嘘つきだとも！嘘つきで悪けれや、結婚詐欺だ』

『結婚詐欺。』

『實に大膽なお婆さんと、娘さんだ。結婚してやると巧みに人を釣つておいて、散々お金を費はせた揚句の果てに、舌をペロリと出して逃げ出さうといつても、さうは易々と、問屋がおろしませんよ』

『何て失禮なことを仰言るんです。巧いことをいつたのは、あなたです。わたしに少しばかりの恩を被せて、義理でしばつて、娘を自分の物にしようとした、あなたこそ色魔ぢやありませんか』

『色魔はおどろいた。色魔つてのは、結婚の目的もなしに、女を弄ぶ男のことだ。私は始めから、お嬢さんをお嫁さんに下さいといつて、あなた方をいろ／＼お世話はしたが、眞理子さんには指一本ふれなかつたんだからな。あなた方のために、お金を費つたり、迷惑したりこそし

たが、そのために何一つ得はしなかつた。徳をしたのは、あなた方ぢやないか。それとも、私の世話になつたために、あなた方が何か損をしたと仰言ることがありますかな、どうです。そんなことは、幾ら厚かましくても、云へた義理ではないだらう、人をだましておいて、色魔呼ばりは慎しんだ方がいゝのだ』

これは恐ろしい男だ、と松代はしん底から戦慄した。今まで、こんな男に娘を嫁にやつたら幸福だらうと思つた自分の愚かさをつく／＼身にしみて思ひ知つた、そして、いよく娘に會つて詫らなければ、立つ瀬がないやうな氣がして來た。

『あなたと、こんな淺ましい争ひをするやうになつては、わたしもこの上御厄介になるのが心苦しくなりました』

松代は、こんな男に嚇されて負けてゐては取返しのかぬ事になると思ひ、こゝで弱味を見せてはならないと、一生懸命、勇氣を振ひ立たせながら、

『お互に、いへばいひ分はどつさりあると思ひます。でも、折角いままで美しく交きあつて頂いたので、お互に何もいはないで、笑つてお別れした方が、さつぱりするのぢやないで

せうか』

『こつちには云ふ分があるが、そつちに文句はないはずですがね、もし私が紳士でなかつたら早い話が、今までの下宿賃をどうしてくれる、熱海に湯治させた費用を返してくれ、と居直つても、あなたとしちやア一言半句、文句の出しやうはないはずだ、おつと、怒らないで下さい私も紳士だ、そんな吝なことを、あなたに申し出ようとは、これつばかりも思つちやゐません』

と、中原は笑つたが、その笑ひ顔には今まで松代に見せたことのない、いふにいはれぬ野卑な表情が匂ふのだつた。

『兎も角、わたしは、娘に會ひたくありません、大變永らく御厄介になりましたが……』

と、松代は、いつまで議論してゐても限りがないので斷乎とした決意を見せるために、ひどく冷酷な表情になつていつた。しかし『この家が出られるものなら、出てごらんない』

と中原は、わざと落着いてせうら笑ふのだつた。

『出て行きますとも、永らく御厄介になつて、それは心からお禮を申し上げますわ』  
『など、いつて、機嫌を取つて下さつても駄目です、私は、どうあつても、あなたをこの家から一歩も外には出しませんよ』

『わたしは、どうあつても、失禮させて頂きます』

『それほど出て行きたいのなら、一度眞理子さんをこゝに呼んで、來させると好いんだ、あの人が、私の前に手をつけて詫るなら、私だつて快く、あなた方をこの家から出して上げます』

『何の権利で、あなたは、そんなことを仰言るんです』

『なぜつて眞理子は』

彼は急に、眞理子の名を敬稱なしの呼びつけで云つた。

『眞理子は、あなたといふ親から許された私の内縁の妻だから——』

『何といふいひが、りです。そんな事を仰言るのなら、もうわたしは我慢がなりません、眞理子には濟まないことです。わたしは、これから運送屋に行つて、人足をつれて手で、荷物をこしらへさせます。あなたの顔を見てゐるのも汚らしい……』

と、今にも立上らうとする氣配を見せた。しかし、中原は落ち着いて、

『ちよつと待つて下さい、眞理子は私の内縁の妻です、して見ればそこにある算笥は眞理子の嫁入り道具と見なければなりません。勝手に離縁して行く嫁の荷物なら、めつたに引渡すことは出来ないはずです、その荷物はおいて行つて貰ひたいですな』

松代は青ざめた。こんな無法ないひがかりといふものが、又とあるだらうか、幾ら中原でもそれは冗談半分、こららをからかつていつてるだけの事ではないかと、しばらく彼の顔いろを窺つたが中原は挺子でも動かない面持で冷やかに目をそらしてゐるのだつた。

『ねえ、中原さん』

松代は今正面から打つかる元氣を失せて、弱々しくいつた。

『あの算笥は、火事であつた一つ残つた財産ですわ、あれがなくなつたら、わたしども親子、明日から着るものに困ります、それも、大した物が入つてゐるわけやありません、碌な着物はありません、あんなもの、お宅に残したつて、何の足しになりませう、意地わる仰言らないでわたしに持つて行かせて下さいましよ』

弱々しく、やさしく、そして、彼女は卑屈な笑ひさへ、硬ばつた顔に泛べて見せた、けれども中原は冷やかに、

『だから、眞理子さんに詫りに來させなさいといつてるんだ。荷物を渡す渡さないはその上のことだ』

しかし、松代は、もう一度衰れつぽく下手に出てたのを見て、中原の返事は同じだつた。

『よろしいぢや、わたしは手ぶらで出て行きます、あなたは泥棒だよ』

松代は矢庭にさう叫んで立上つた。物凄しい形相だつた。

中原も、意地を張つて見たもの、所詮、暴力に訴へてまで、松代を家に留置くほどの悪黨ではなかつた。

松代が、引越屋を呼んで來て、荷造りをして出て行くのを、どうする譯にも行かなかつた。嚇しは利かなかつた、と自嘲的に吹き、ベツと唾を吐く位が關の山だつたのである。

どうせ松代を引留ておいた所で眞理子が歸つて來さうもないので、よく／＼考へて見れば、

松代の方から出て行くといひ出せば、これで幸ひと追ひ出すのが惻口なやり方だつたほどなのだ。

『もう、お婆アさん行つちまつたの。もう眞理子姉ちやまも、誰も歸つて來ないの？』

と、みち子に悲しげに訊かれるのが、中原には子供にまで輕蔑されるやうで腹が立つてならない。實は、かねがね、みち子に、今に眞理子がみち子の新しいお母さんとして戻つて來るといひきかせてあつたので、みち子が子供の敏感さで、松代の出て行く氣配から、事の破滅を悟つたのは無理もないのである。

『お前には、別に好いお母さんを捜して來てやる』

と中原はむしやくしや紛れに、叱るやうにいつた。

中原といふ男は、ある大きな化粧品問屋の小僧から、刻苦して今日を築き上げた、いはば立志傳的な人物であるが、今は僅な財産の利殖で、それほど年でもないのに、隠居同様に暮してゐるのだつた。といふのは、主家から獨立して製造を始めた洗粉が、一時馬鹿當りして、ちよつとした成金になつたのだが、その洗粉が新しい商賣仇の製品にだん／＼押されて來て、去

年あたりから店も工場も閉鎖するの止むなきに立至つたのである。しかし、残りの財産を資本にして、もう一度世の中に返り咲く機會は今でも狙つてゐる、そんな男だつた。

『ほかのお母さんでは厭！ あたしは、どうしても、眞理子姉ちゃんが好き！』

子供は、中原を責めるやうにいつた。

『あんな生意氣なお姉ちゃんを、お母さんにしたら、みち子が可哀想だよ』

『そんなことないわ。あのお姉さま、あたしを、とても可愛がつて下さつてたんだもの！』

と、みち子は、小さな身體をゆすぶつて執拗に主張しつゝけた。

『眞理子姉ちゃんのところへ、あたしを連れてつて頂戴。お父さまあたし、お姉さまに、よく

お願いして見るわ』

『ほかに、好いお母さんは、幾らでもあるといつたら！』

と中原は、うるさくなつて、こはい顔をして睨んで見せた。

すると、子供は、ワツと聲をあげて泣き出してしまつた。

その、いかにも悲しげな、怨めしげな泣顔を見ると、中原は

(子供には協はん)

と、心の底で咳かすにゐられなかつた。子供は、いつまでも泣きつゝけた。そばでそれを見てゐるうちに、中原はだんだん心が沈んで行つた。何といふこともなく世の中から見捨てられ子供にまで愛想を盡かされたやうな氣持ぢだつた。

(世の中の奴は、女をどういふ方法で手なづけるのだらう。俺にはとても分らん)

それを思ふと、もう一度、商賣を盛り返さうといふ野心までが、しなび果てゝ行くやうな氣がした。

## 新 世 帯 へ

妹の田鶴子の病氣がよくなつたので、その全快祝ひに、近藤は大きな電氣蓄音機を買つて來た、マホガニー仕立ての堅型なので和室に置いては調和がとれないから、少し狭いのを我慢して應接室に置いた。



田鶴子は大喜びで、日に何度となく應接室に入つて行つてレコードをかける。病氣以來、世間からは引込み勝ちで、といつて頻繁に訪ねてくれるお友達がもしあるとすれば眞理子位のものだつたのに、その眞理子も身邊多事で、先日一度来てくれただけの寂しい田鶴子にとつて、レコード音楽は新しい心の慰めだつたに違ひない。

今日も田鶴子は、ドヴォルジャクの「新世界よりの交響樂」といふレコードをかけて、ひとり楽しんでゐた、窓のカアテンをあけると夕陽に眞赤に染まつた庭が見える。そのねつとりと明るい空氣の中に爛れたやうなもくれんの花が咲いてゐるのだが、さういふ景色を眺めながら交響樂の第二樂章のゆるやかな流れに思ひを乗せてうつとりとしてゐると、生活の豪奢もこゝに極はまるかといひたいほど幸福だつた。

それほど幸福なのは、音楽のせいばかりではない。かねてから、兄は、樫本のために、神田厚子のこれまでの生活について、祕密探偵社に調査を依頼してゐたのだが、その報告が、先程兄が會社に行つてゐる留守中、家に届いたのである。近藤は、樫本があまりに厚子に對して責任を感じすぎるのを馬鹿らしいと思つて、厚子の正態を暴露したかつたのである。

兄は留守だつたが、田鶴子はそつとその探偵社からの報告を読んで見た。果して、兄の推察どほり厚子に子供があるなどは、大嘘で、いまは離別したも同然になつて熱海の旅館に女中奉公などしてゐるが、良人はちやんとある。酒のみで、ぐうたらで、この良人のために厚子も苦勞してゐるらしい。それは可哀想だが、しかし、むかしの愛人の樫本との間に子供があるなど、は、それを種に何ほどの金にしようといふ野心から出た眞赤な嘘であることは、種々の方面からはつきり證據立てられる。

探偵社のこの報告書は、田鶴子の氣持を非常に明るくした。

(なにも、神田厚子などいふ存在にこだはつて、樫本さんを變な眼で見る必要はないんだわ！)

變な目で見さへしなければ、樫本は立派な紳士だ、とすれば――

田鶴子の胸はひとりでに躍つた。

第二樂章が半分終つて、レコードを裏返さねばならなくなつた。それで立上りかけた時、扉があいて、いつの間に會社から歸つたか兄の近藤が、愁はしさうな顔で入つて來た。

『また新世界をかけてゐるのか』

『だつて、これが一番好きなんですもの』

『ちよつと、そこにおかけ、話がある』

『なアに』

と何気なく訊いたが、ふと思ひ出して、

『あゝ、さうく、さつき探偵社から報告書が届いてよ。厚子さんに子供があるなんて、全然出鱈目らしいわよ』

と、懐ろから、大きな封筒に入つた報告書を出して兄に渡したが、兄は別に讀まうともせず、

『出鱈目なことは、はじめから分つてたさ。しかし、君はそれでほつとしたかね』

『えゝ、それは、勿論』

『ところが——困つたことが出来たんだ』

『困つたつて、何故？』

田鶴子は、不安で顔曇らせずにみられなかつた。

『田鶴子、君は、樫本と結婚したいんだらう。僕も、もう先からそれを察してゐて、なるべく君の望みが協ふやうにしようよと、いろく努力して來た。それは、分つてくれるだらう』

『分つてますわ。分つてますわ』

話が、こんなに急に具體的な核心に觸れてしまふと、もう臆病に遠慮したり、見栄を張つたりして居られなくなつて、田鶴子は素直にうなづく他はなかつた。そして、

『それが、どうして急に困らなければならなくなつたの？ まさか、あたしに諦めろと仰言るんぢやないでせうね』

と、訊くことも、露骨になつてしまつた。

『諦めて貰ひたいんだよ。田鶴子！』

兄は、泣きさうな顔になつてさういつた。

田鶴子は、ハツと顔いろを變へて、

『諦めろと仰言る！何か、それには絶対の理由があるかのやうに』

『絶対の理由があるんだ、兄として、あの男に、妹をやるわけに行かなくなつたのだ』

『だつて……あたしは許してるんですよ、厚子さんとあの人のことはね、過去の、それも、ずつと若い時の、誰でも陥りやすい誘惑に落ちたといふだけのことぢやありませんか、それに子供があるといふのも嘘だと分つたんだし……』

『そんな事ぢやないんだ。君が、あの男と結婚してならない理由は、そんな所にあるんぢやない』

『ちや、どこにあるの？』

田鶴子は、強く、詰め寄るやうに訊いた。

『田鶴子、君と俺は、寂しい兄妹だ、親もなければ親類もない、たつた二人の兄妹だつた、これからも、いつまでも、たよりになり合つて行かねばならない、僕は、一日も、君の幸福を祈らずに済んだおぼえはない』

『そんなセンチなことをいつて、かんじんな理由を仰言らないの、卑怯だわ』

『センチかも知れないが、それは眞實でないとはいはせないよ、そして、それがまた、君にあの男を諦めて貰はなければならぬ理由でもある』

『……………』

田鶴子は、たゞ青ざめて、兄の悲しげな顔を睨むばかりであつた。

『僕が、君について一番心配なのは、君の健康だつたんだ。ところが、今日、会社からの歸りに、皆木先生の所に寄つて、君が大陸の風土に堪へ得られる健康かどうかを訊いて來たんだ。君の主治醫である皆木先生にね——』

『大陸の風土が、あたしの結婚に何の関係があるんです』

『あの男は、大陸の土になるといふ運命を選んだといつて來たんだ。一個の男の大決心を、誰が動かすことが出来よう、だから、僕は心配して皆木先生に訊いた、皆木先生の答へは、もし君が大陸に花嫁になつて行けば、三月もたゝぬうちに病氣をぶり返すだらう、倒れるだらうといふのだ』

近藤は立つてレコードをかけた。第二樂章のつゞきが、ゆるやかに鳴りはじめた。

『淋しいのは君ばかりぢやない。僕も、先夜、眞理子さんに求婚をはね付けられた。田鶴子、そこで僕らは、眞理子さんと榎本とのことを、もう一度考へ直さなくては……』  
レコードの下で田鶴子は静かに泣いてゐた。

それからの數日間、田鶴子は身も瘦せほそるほど、考へ抜いた。

田鶴子自身、皆木醫師のところへ出向いて、自分の健康についてももう一度詳しく訊いても見た、皆木醫師は卒直に答へてくれた。

『あなたの身體で、支那大陸で三ヶ月も暮らせたなら奇蹟ですよ。殊に漢口といつたら、世界でも有名な不健康な土地です』

もし彼女のやうな弱い身體で榎本と結婚したら、榎本は病妻のための後顧の憂ひに堪えられぬだらう、それで思ふやうな活躍も出来なかつたら、榎本の生活の意義も半ば以上失はれなければならぬ。

たとへ病氣で倒れても、榎本の妻として死ぬのは自分にとつては本望であらう。けれども、

榎本の幸福を思へば——田鶴子も次第に兄が『諦めろ』といふ氣持ちが分つて來た。

悲しかつた。榎本の妻にならうといふ望みを、病氣のために放棄しなければならぬ。いつそ病氣など癒らないで、このまゝ死んだ方が増しだつた。

『ねえ、田鶴子、なぜ眞理子さんが、僕の申し出を受け付けなかつたか、考へてごらん。眞理子さんは、矢張り、榎本のことを思つてるんだよ』

兄は囁んで含めるやうにいつた。

『僕が、君と榎本とを結婚させたいために、眞理子さんを榎本から僕の方に向かせる。君が、僕と眞理子さんを結婚させたいために、榎本を眞理子さんから引きはなして、君のものにしようと努力する。神さまが、もしさういふ風におとりになつたら、大變ぢやないか？ 形の上でだけいへば、さういふ風に見られても仕方がない。だとすれば、この形は、醜惡すぎる！』

さうだ、この形は醜惡すぎる——田鶴子は心ひそかに兄に同意せずにもられなかつた。  
『僕たちは、さういふ醜惡な形にはまり込んでゐるなら、はまり込んでゐたら、それから離れ去るのが當前ぢやないか知ら、兄妹が自分たちの利益をはかつて協力して、一人の女を——』

眞理子さん並に陥れるつもりはなくても、さういふ形になつたとすれば、恥知らずといふことになる』

兄のいふ通りだ、と田鶴子は思つた。

『さうよ、兄さん、それに、榎本さんと結婚したいといつたところで、かんちんの榎本さんは厭だといふにきまつてるわ』

さういつて、田鶴子はいよ／＼恥づかしくなつた。

『一番いゝのは、あたしたちが、眞理子さんと榎本さんを結びつけるやうに、誠意を以つて努力することだつたのねえ』

この思ひつきで、急に田鶴子の胸は晴れ晴れと明るくなつた。新しい心の世界が展けて來たやうだつた。『新世界より』ではなくて『新世界へ』の交響樂が、壯大に彼女の胸の中で鳴りはじめのを感じた。

さういふ譯で、或日、田鶴子は日本橋の小澤塗料會社に、勤務中の補見眞理子を訪れたのである。

『あたし、あなたに、お詫びに來たのよ』

二階の應接室にとほされて、眞理子の顔を見ると、田鶴子は朗かにさういつた。

譯が分らぬので、眞理子は面喰つて、

『お詫びされる覚えはないわよ』

『だつて、いつかゐらした時、あたし、散々榎本さんの悪口いつたでせう。むかしの女に子があるなんて……』

『そんなこと、あたしに關係のあることぢやないわ』

『あれ嘘だつたのよ。子供なんか生れはしなかつたのよ』

『嘘だつたとは……』

と、ふと眞理子は顔いろを動かして、

『呷田厚子さんが、あなた方にそんな嘘をついてたんですか』

『さうなの。榎本さんからお金を取らうと思つて、あの人、出鱈目をいつてただけなのよ』

『それが出鱈目つてことが、どうして分りましたの?』

『兄が私立探偵にたのんで、詳しく調べ上げたんですよ』

『さう』

眞理子は、墓石のやうに青ざめて、がつくり椅子の中に沈み込んでしまった。

さうだつたのか! では、榎本は、あの女に、何も大金をやつたりする心要がないといふのか?

そのお金を必要だと思へばこそ自分は小澤氏と、思はぬ婚約をしてしまった。それほどの、彼女の一生を賭けての犠牲も、無駄だつたといふのか。

（いや、さうではない、どうせ、あたしは榎本さんのお金を焼いてしまったのだから償ふ義務があるのだ、それに、たとへ子供を生んでゐなくても、あのみじめな神田厚子の姿を思へば、あのまゝには放つておけない気がする、あの女の心からとはいへ、榎本さんだつて、若氣の誤ちだつたといつて責任を逃れようとする人ではないはずだ、だとすれば、あたしの犠牲も、決して無意義ではなかつた!）

眞理子は一生懸命、自分の婚約、この一生の幸福を擲つたにも等しい犠牲を意義づけようとして、さまざまの雑念と闘ひながら眼をつぶつてゐた。

『ですからね、眞理子さん』

と、相手の心のうちを知る由もない田嶋子は、いよ／＼朗かに言葉をつゞけた。

『神田厚子など、いふ存在は、すっかり忘れて、榎本さんを考へて上げなくちゃならないのよ、榎本さんは、矢張り、えらい人ですわ。立派な紳士よ、今度、漢口の銀行に勤めて、いよいよ一生を支那復興のために捧げる覺悟をきめたんですつて——』

あゝ、もう榎本のことは、何もいつてくれるな、と眞理子は叫びたいのだつた、もう遅い! もう自分は、他の男と婚約してしまつた。

『眞理子さん、あなたはこんな事を考へない? 大陸の復興に一生を捧げた男が立派なら、その人の一生の伴侶になつて、その人と一緒に大陸の土となる覺悟で、その人の妻になるのも立派な女だと……』

自分はその立派な女にならうとした、どんなに彼の妻にならうと熱い胸を燃やしつゞけたこ

とか。しかも、今は一切が終つてゐる。自分は他の男と婚約してしまつた。

『ね、あたしは、あなたこそ、その立派な女になる資格のある人だと思ふんだけど』

『もういいないで』

と、眞理子は堪りかねて手を振つた。

『私、そんなこと考へてもゐないわ、あたしは、つまらない女なの、それよりね、お歸りになつたら、お兄さまに仰言つてよ、御心配かけてゐましたが、母もあたしの所に歸つて来て、今はアパートと一緒にゐますから、御安心下さいつて……』

結局、田鶴子は要領を得ずに別れを告げねばならなかつた。田鶴子の歸つて行く後ろ姿を、

二階の窓から眺めおろしながら、

『あの人も何だか寂しさうだわ』

と、眞理子は咳かすにはゐられなかつた。

樫本の新しい勤め先きの銀行は多分、この年の夏頃、その本據である漢口に歸れるだらうと

いふことだつた。何れにしろ、皇軍が漢口を占領するまでは南京支店に待機してゐなければならぬ。

ところで、或る事で、大蔵省に打合せ旁、指令を仰がなければならぬ用事が出来て、誰か一人、行員を東京に出張させることになり、その役目として新任の樫本に白羽の矢が立つた。それで、樫本は急に、約一週間の豫定で、内地に還ることになつた。

いま、上海から福岡への旅客機の中に、樫本は乗つてゐる。久し振りに東京の土を踏むのもあと数時間の後だと思ふと、胸は怪しく躍るのである。正午頃、福岡に着くであらう、そして一時に、福岡で機を乗換へ、四時過ぎには羽田に着陸するだらう——

近藤には、上海の飛行場から電報を打つておいた、土曜日だから多分、羽田まで出迎へてくれるに違ひないのだ。

しかし、刻々内地に近づく飛行機の中で、彼がじつと見詰めてゐるのは、近藤の顔でもなければ、田鶴子の姿でもなく、況んや今は思ひ出すのも厭な厚子の匂でもない。

あゝ、眞理子！

たゞ、たゞ、眞理子にだけ逢ひたい！

とはいふものゝ、眞理子に逢ふのは、嬉しいといふよりも、寧ろ苦しかつた。なぜなら、彼は眞理子とは決して結婚しようとは思はない。大陸での自分の前途は決して生やさしいものではない。その苦勞を眞理子に分擔させる氣持ちはなかつた。眞理子とても、氣候風土のちがふ支那で不自由な生活を堪へ忍ぶのは望まないであらう。あれほどの女なら、内地で幾らでも良縁があるのだ。だから、こんなにも戀しい眞理子ではあるが、今度久し振りに逢つても、戀しがつてゐるとは素振りにも現はしてはならないと心に決めてゐるのだつた。

それでも、矢張り、せめて顔だけでも見たら、どんなに幸福だらう、一緒にはなれない戀しい人、愛すれば愛するほど、いや、愛すればこそ一緒になつてはならない人！

（俺のために墮落したといふなら、厚子とこそ結婚すべきだ、厚子を救ふのが、俺の責任ではないか、しかし……）

彼は飛行機の窓から海を見おろした。遠い行手は霞んでゐるが、二千五百米の上空と海との間には千切れ雲もなく、波はキラ／＼と朝日に輝いて見える。

エア・ガールが、十八人の乗客に、お辨當のお壽司を配りはじめた。

『あと、何分位で、九州が見えはじめますか』

と訊くと、エア・ガールは、

『程なく見えて参りませう、霞んでゐなければ、もう見えてゐるはずですが』

と答へた。埃つぽい南京から來た眼には、若いエア・ガールは雨に洗はれた白百合のやうに清淨に美しく見える。

おいしい水と、おいしい米と、美しい女との國は我々のものだ！

はつとする間に、もう福岡の沖を飛行機は悠々と旋回してゐた。

『腰掛のバンドを締め、莫は喫ふべからず』

といふ意味の信號が機内の電氣文字に現はれてゐた。着陸だ。ごつん、と、日本の土が、彼のお尻を叩いて呉れた。

何ともいへぬほどうれしかつた。



東京の、羽田飛行場に着いたのは、丁度、四時三十分だった。

着陸する刹那に、窓から眺める眼に、下の方で手をあげてゐる大勢の出迎人の中に、見おぼえのある若い男の姿が、はつきり映つた、近藤なのだ。

眞理子はゐない。それが當然ではあるが、妙に物足りなく、そして、寂しかった。そして、思ひ掛もなく、自分の不幸を思ひ知らされたやうな気がした。

『やア、暫く!』

飛行機から降りると、ほかの乗客たちを追ひ抜いて、眞先きに近藤の方に進んで行つた。

『よく歸つたねえ!』

しつかり握手したが、お互の眼に泛ぶ淡い涙は、お互に見て見ぬふりだった。

『すつと歸つたの? それとも……』

『一週間、滞在の豫定だよ』

『ぢや、またあつちへ行くのか』

と、近藤は、がっかりした調子で、

『荷物は?』

『今受取る』

近藤が自動車を用意して来てくれたので、航空会社の車に乗る必要はなかった。

『田鶴子さんは、すつかり快いのかね』

市内に向ふ自動車の中で、早速きいた。

『すつかり快いんだ、今日も、彼奴を連れて来ようと思つたんだが、土曜日の癖に会社が忙しくて、兎や角してゐるうちに、家に電話をかける暇がなくなつて——』

しばらく黙つてゐた、が、ふと咎めるやうに、近藤がいつた。

『君はちつとも、眞理子さんのことを訊かうとしないんだね』

『うん』

それつきり、何もいけなかつた。

そこで、近藤は話をかへて、

『疲れてゐなければ、久しぶりに銀座でも歩くか』

『疲れてはゐないが、腹が減つてる』

『さうか、ぢや、今うちに歸つても田鶴子は君が歸つたつてこと知らないのだから、急にはお料理が間に合ふまい、しかし滞在中は、家に泊つて呉れるんだらうね』

『迷惑でなかつたら……』

『何が迷惑なことがあるものか、ぢや、さういふことにして、兎も角、どこかで、飯を喰ひながら、ゆつくり話さう』

近藤は、運轉手に、築地の方へ、と命じた。

『君も今夜は久し振りだから、内地の美人が見たいだらう』

築地に、近藤が會社の宴會でよく行く待合があつた。

そこで、藝妓が二三人來た、二人は酒を飲み、飯を喰つた。そして、南京の話や、上海の話がいろ／＼出たが、不思議なことに、榎本の心は次第に沈んで行くやうに見えた。

『眞理子さんが、どんなに喜ぶだらう』

近藤が、榎本の心を刺戟するやうにいふと、榎本は、

『僕は、實は、結婚したい女があつて、もし時間が許せば、その女に逢つて見たいと思つてるんだよ』

『眞理子さんだらう』

『いや、厚子だ』

近藤は、びつくりして、

『馬鹿だな、君は』

と笑ひ出してしまつた。榎本はさういはれて、腹が立つよりも、寧ろ友だちから慰め宥められるやうな、ほつとした氣分だつた。

『まあ、榎本さんが、お歸りになつたんですつて？　ほんと、兄さんッ。』

兄からかゝつて來た電話に出た田鶴子は、思ひ掛けない知らせにびつくりして叫んだ。

『永久に歸つて來たつていふんぢやない、又行くんだ。一週間ほど滞在するさうで……』

『その間、あたしの家に泊つて下さるのッ。』

「さうだ。これから歸つて行く、飯は済んでゐるから二階に寢床の用意をしておいて貰はう。今夜はお湯は立てゝあるね」

「お待ちしてゐますわ」

田鶴子は、そは／＼として電話を切つた、すぐ女中に命じて萬端の準備を整へた。そして、一時間が一日のやうな思ひで、兄たちの歸りを待つた。

やがて、門の前に、自動車のとまる音がした、

田鶴子は、玄關の外まで、飛び出して行つた。

「暫く——お丈夫さうで、何よりですわ」

さう挨拶するのも、胸が一杯であるとは何もいへなかつた。

「永いこと病氣だつたさうですが、思ひのほか健康さうですね。相變らず美しい人だ、あなたは！」

まんざらお世辭でもなさうに榎本は眼をみはつて田鶴子を見た。

久し振りに榎本を迎へるために、この上もなく念入りにお化粧した顔を、田鶴子はほのかに

緞らめながら、

「榎本さんこそ、活氣のある現地の匂ひをぶん／＼させて、大層御立派におなりになつたわ」

「僕のは、大陸焼けです」

「さア、兎も角應接室で、一應落ち着かうよ」

と、近藤は先きに立つて家の中に入つた、三人應接室に入つたが近藤はちよつと自分の部屋に用事があつて、すぐそこを出て行つた、二人きりになると、榎本も田鶴子も、妙にぎこちなくなつて、黙つてしまつた。

しばらくして、その苦しい沈黙から脱れ出るやうに、

「今度、お歸りになつた御用件をいひあてゝ見ませうか」

と田鶴子がいつた。

「それは勿論、銀行の用事ですよ」

「それもあるでせうが、他にもう一つ、かんぢんな、あなた御自身の用件がおありなんですか」

『あゝ、いつの間に兄さんから訊いたんです、厚子といふ女のことです』  
と、榎本は、こともなげに笑つた。

『あら、兄から何も大きく暇はないぢやありませんか、ぢや、あなたは、厚子さんの問題を片付けにゐらしたつての？』

『まア、それもあるんです』

『さう……あたしは又、眞理子さんのことでお歸りになつたとばかり思つて來ましたわ』

『眞理子さんが、どうしたんです？』

と、榎本の眼が、ちよつと輝いた。

『眞理子さんと、結婚しに、お歸りなつたんぢやないんですか』

それを聞くと、見る見る榎本の顔いつばいに、悲しげな表情がゆらいだが、すぐそれを淡い微笑で掻き亂しながら

『今も、その事で、近藤君と議論したんだが、僕と結婚したら、眞理子さんは非常に不幸ですよ、僕と結婚して仕合せになれる女は、世の中に厚子位なものです』

田鶴子は、あきれた眼で、じつと榎本の顔を眺めてゐたが、

『ちよつと、お待ちになつてね、すぐ戻つて來ますから』

といつて、榎本を一人應接室に残したまゝ廊下に出た。すぐ兄の部屋に行つて見ると、兄は會社の用件でどこかに急ぎの手紙を書くべきであつたのを、今思ひ出したといつて、ペンを走らせてゐる最中だつた。

『あのね、兄さん、そのお手紙が済んでも、暫く應接室にゐらつしやらないでね。あたし、これから榎本さんに、一談判しなくちやならないの』

『お嫁さんにして呉れと、膝詰め談判？』

と、兄は愁はしさうに眼を上げた。

『まア何でも好いから、あたしと榎本さんと、暫く二人きりでお話させて頂戴』

『しかし……眞理子さんのことを君は忘れはしないだらうな』

『あたしを信用して下すつてたら好いのよ』

そこで、兄と妹は、ちよつとお互をいたはり合ふやうな眼を交はした。

田鶴子は、勢ひよく應接室に戻つて來ると、

『お待たせしました、兄は會社用の手紙を書かなければならないのを、今おもひ出して……』

『あゝ、どうぞ、僕にはお構ひなく』

さういつてる所に、女中が顔を出して、お風呂は、と訊いたが、田鶴子はそれも後程にといつて退らせておいて、

『ね、樫本さん。あたし、ちよつと、あなたに、折入つてのお話があるのよ』

と、いよ／＼、いはゆる膝詰め談判の口火を切つた。

『神田厚子さんは——苗字が神田になつてゐるのでもお分りでせうが、あの方には御亭主がおありなのですよ、あの方の墮落の責任が、あなたにあるといふのも貴方の大甘々な感傷ですわ、子供が出來たといふのも、あの方の出鱈目です。あたしたちは、興信所にたのんで何も彼も調べ上げました、興信所の報告書は後ほどお目に掛けます』

『興信所にまで頼んで？』

『要らぬおせつかいだと仰言るの？、でも、あなたが、下らない感傷から、一生の大損をお受けになるかも知れないのを、あたしたち黙つて見てはゐられないぢやありませんか』

『しかし僕が責任を感じたからとて、必ずしも大甘々なセンチメンタル主義だとばかりに限られないでせう』

『たとへ、立派な道徳であつてもですわ、兎も角、神田厚子さんには、立派に御亭主がおありになるんですわ。それだけは確な事實ですわ。それとも、あなたは、よその奥さんを、横取りしなければ、良心が休まらないと仰言るんですか』

樫本は答へに窮して、口を噤んだまゝ、相手の異常に熱して來た表情を、不思議さうに見守るだけだつた。

何んのために、この女は、他人のために、こんなにも熱心におせつかいを焼くのだらう。

『横取りしようとはいひません、既に人妻になつてゐるのなら、せめて、お金でもやつて、物質的にでも救つてやりたいと思ふんです』

『それなら、安心しました、が——』

田鶴子は、そこで、急にいひにくさうに、いひ淀んだが、  
『實は、先日、あたし、眞理子さんに會つて聞いたのですが、あなたがアテにしてらつしやる財産は——すつかり無くなつてゐます』

『財産が無くなつたとは——』

樫本は、ぎよつとして訊き返した。

『あの、眞理子さんに預けてあつたいはゆる財産のことですか？』

『さうです』

樫本は顔いろを變へた。

財産が無くなつたその事にびつくりしたのではない。人から預かつた財産を無くしなければならなかつたほど、眞理子に不幸なことがあつたのではないかといふ豫感が、びんと胸に來て、急に息ぐるしくなつたのだ。僅な財産など、無くならうが減らうが、そんなことは大した問題ではない。しかし眞理子が不幸な境遇に陥つたとすれば、樫本の心は押しつぶされるほど

悲しいのだ。

『いつたい、どうして無くなつたのです』

と、彼は息ぐるしさをかくして訊いた。

『焼けたのです。火事で』

『あの人の家が、火事で焼けたのですか』

すると、不可抗力だつたのか。彼は何といふこともなく、ほつとしたが、火事で焼けたら、自分の財産よりも、彼女は家財を無くして、どんなに困つたことだらうと再び、胸が痛くなつた。

『さうです、お隣から出た火で——勿論、あの方の家財も焼けてしまひました』

『それは、それは——』

しん底から氣の毒さうに、彼は眉を曇らせた。

『ですから、あなたの財産が焼失したつてあの方の罪ぢやありませんわ』

『さうですとも！』

と榎本は、力をこめてうなづいた。

『先日から、あたし、二度も三度も、あの方に逢ひましたのよ、そして、あの方、いままであ  
たしたちにも、かくしてらつしたけれどとうとう、あなたの財産焼いてしまったことを、あた  
しに打明けて下さつたの』

『さうですか』

と、彼は深い溜息をした。

『あの方、あなたに、どういつて申し譯しようかと、ずるぶんお苦しみになつたのよ』

『あ、可哀想に！ 不可抗力で失くしたものを、誰が咎めるのですか。どうして僕にすぐ  
打明けて呉れなかつたのでせう。ほんとに可哀想だ。僕はそんなに度量のせまい男ぢやないの  
に』

榎本は眼に涙を一杯うかべて、嘆息した。

『それにね』

と、田鶴子は沈んだ聲になつて、

『あなたが、あの財産を、厚子さんに上げるなど、仰言つたものだから、眞理子さんは、いよ  
いよ苦しくなつて、どうしても焼いたものを辨償せすにゐられなくおなりになつたのよ。だか  
ら——』

その以前から、それを辨償しようと思へばこそ、南京に財産の額を問ひ合せて來たりしたの  
だと、今になつて榎本も初めて思ひあたるのだつた。あの時は、妙な手紙をくれたと思つた  
が——

田鶴子は言葉をつづけた、

『ですから、榎本さん、あなたはどうしても、眞理子さんと結婚なさる義務がありますよ』

この急激な忠告に、さすがの榎本も度を失つて、

『僕は大陸の土になるんですから——眞理子さんを、その道づれにするのは可哀想です』

『でも、でも、もしあなたが結婚なさらなければあの方は、お化けみたいな片輪と——』  
といひさして、田鶴子はしく／＼泣きだした。

## また逢はじ

『世の中には、結婚式もあげ、新婚旅行にも出て、それでその初めての夜、結婚を解消した女の例もあるわね』

事務所の退け際に、突然眞理子を訪れて来た田鶴子だった。そして、眞理子を外に引っぱり出すと、いきなり、そんな妙なことをいひ出した。

『そんな事いつて、あたしの婚約を解消させようたつて、駄目よ』

と、眞理子は苦笑した。外に出ると、どちらから云ひ出すともなく電車通りの方へ歩きだしたのだが、眞理子は立止まつて、

『これから、あたしのアパートへ行かない？ お母さまも、久しぶりに、あなたにお目に掛りたがつてるわ』

『あれから、吉祥寺の中原とか云ふ人、文句を云つて来ない？』

『来ないわ、お母さまも、それをおそれてるんだけど、どうやら無事にすむらしいの』

『あたしも、あなたのお母さまにもお目にかゝりたいけれど——』

と、ちよつと考へて、

『それより、あたし、あなたを、いゝ所へ連れて行つて上げたいの。そのために、あなたを誘ひ出しに来たのよ、あなたも結婚してしまへばさう／＼あたしも遊べなくなるでせう？』

『何所へつれてつて呉れるの？』

『まア黙つて、ついてらつしやいよ』

胸に一物ありさうに、田鶴子は頬笑んだ。

三越の前まで来ると、田鶴子は地下鐵の方へおりて行つた。眞理子も、云はれる通り、結婚したら、田鶴子ともさう度々は遊べなくなると思ふので今宵は友達に快くつきあふ腹をきめた。

いまが方々の事務所の退け時で地下鐵はひどく混雑してゐたが、二人はやつと席に坐ることが出来た。



『それで、あなた方は、いつ結婚するの』

と、田鶴子は聲をひそめて訊いた。

『來週、結納を取交はして、式は月末になりさうなの』

『今は、衣裳の準備に忙殺されてるつてわけね』

『そんなに業々しい事はしないわ、ごく内輪に、ひっそりと——だつてこんな時勢ですものね』

『それで、あなた、幸福』

『残酷なこと、きかないでよ』

と、それでも眞理子は、出来るだけ快活に笑つた。

『ごめんなさい、ところで、婚約後は、さだめし、お二人、大變なのでせうね』

『大變とは？』

『つまり、有頂天になつた小澤氏が、やれ散歩、やれ觀劇、といつた工合ひに、あなたを方々につれて行くんでせう。美人の婚約者を得た男の特權だといつた顔で……』

『ところが、あの人は、そんなことは嫌ひなの、婚約したとたん散歩にも出なくなつたわ。

事務所以外では、決して二人きりで會ふまい、と、あの人が約束したの』

『まア、どうして、そんな固苦しい……』

『だつて、それが、あたしのお母さまへの禮儀だと、あの人がいふんですもの』

それを聞くと、田鶴子は、いきなり、眞理子の耳に口を押しあてるやうにして囁いた。

『お、あなたは處女だつた！』

『失禮なこといふ人ね』

と眞赤になる眞理子をいたはるやうに、

『ごめんなさい、だつてね、今日あなたを連れて行く所はね、處女でなければ入れない、とても聖なる所、聖なる花の咲く所なのよ』

地下鐵は、田鶴子の謎のやうな言葉が、まだ眞理子の耳底にこそばゆい感覺と共に残つてる間に銀座に着いた。

『聖なる所つて、まさか、あたしを禮拜堂につれて行くつてわけでもないでせうね』

『どうだかね。ともかく、あとであたしあなたに感謝されるにきまつてゐる』

二人は地下道から、銀座の歩道に上つて行つた。暮れ方の街には明るい灯が匂ふやうにかゞやいて行き交ふ女のお化粧した顔がこの世ならず美しく見えた。

『みんな楽しさうに歩いてるわねえ。殊に若い人たち活気のある顔をしてるわ』

『それはね、みんな事變に對して眞剣になつてゐるからよ、個人的な心配や不幸などに心を患はされてはゐられない、もつと大きな目的のために、どんな苦難だつて襲ひかゝつて來いといふ吐が、みんなの内部にしっかりと決まつて來たからぢやないか知ら』

『でも、それだからといつて、個人的な不幸や幸福を閑却してしまふのも、人生に對してまじめだとはいへないでせう、問題に突き當るたびに、最も合理的に、秩序正しく處理しなければ、いけないでせう』

『それはさうだけれど——』

それつきり、二人は黙々として群集の中にもまれながら歩いた。

やがて、角の洋菓子屋の前を曲ると、人通りが俄に減つて、涼しい風が地上から湧いて來るかのやうな感じだつた。

『どこまで引張つて行くのよ』

と眞理子が訊いても、それには答へないで田鶴子は、

『正直に答へて頂戴。いつたい、あなたは婚約して、多少でも小澤氏を愛する氣持ちになつて來た？』

『愛したいとは思つてるんだけど——もう、そんなお話は止ませうよ』

『いや、止されない。あなたのことを一生懸命に想つてゐるお友達だと思つて、あたしにだけは打明けて頂戴よ。どうなの。小澤氏を尊敬はしても、愛することは出來ない、といふのが、あなたの偽らざる心持ちぢやないか知ら』

『今更、そんな問題にこだはつて見たつて、何の役にも立ちはないわ』

と、眞理子は泣きさうな顔になつていつた。

『あたしは反對よ、中途半端で、問題を投出すのが、一番いけないぢやないか知ら、最後まで』

で諦めないで、理想のために闘ふのが本當だと思ふわ』

眞理子は答へなかつた。

西銀座の並木路に來た、二人とも黙つてしまふと、田鶴子はぐん／＼足をはやめはじめた。

『ほんとに、何所に引張つて行くの？』

『こゝよ』

と、田鶴子は突然、立ちどまつた、關西料理で有名な『大隈』の前だつた。

『さア、お入んなさいよ』

と、躊躇する眞理子を促して田鶴子は入つて行つた。いらつしやい、と女中たちに賑やかに迎へられる上に、土間のテーブルで酒を飲んでゐる男たちは一齊に、美しい女二人に眼を注ぐし、眞理子は身のすくむ思ひだつた。

土間からすぐ階段をのぼつて、二階に辿り着くまで夢中だつた。その二階の廊下に迎へ出た女中に田鶴子は何か耳打ちしたあとで、眞理子に、

『このお部屋よ、お入んなさい』

といひ、襖をあけた。

極本が、ひとり、その座敷に待つてゐた。

眞理子をその小座敷の中に、背ろから押すやうにして入れると、田鶴子は襖を強く閉めて、自分だけは廊下に残つた。乳房が波打つほど騒ぐこゝろを、じつと押さへて、しばらく立つたまゝ、襖の向ふの氣配をうかゞつて微笑したが、人に見られたら恥づかしいやうな歪んだ微笑だつたに違ひない。

『まア、極本さんですの？ いつ、こちらへお歸りになつたの、あたし、ちつとも知らなかつた！』

中から眞理子の異常に昂奮した聲が聞えて來た。

『まアお坐んなさいゆつくりお話ししよう』

『でも、あたし……』

『いや、焼けてしまつた荷物については、お互に忘れてしまひませう。そんなことであなたを』

長いこと苦しめたとおぼえ、あなたに何んとお詫びして好いか分らない。さアお坐んなさい、あ——何は田鶴子さんは？」

『田鶴子さん！』

と眞理子が、どうやら襖を開けに来さうな氣配なので、田鶴子はあわて、廊下から階段の方へ曲つて身をかくした。

果して襖の開く音がして、

『田鶴子さん——』

と眞理子が呼んだ。田鶴子は、それには答へないで、そつと階段を踏んで、土間におりた。

『まアお歸りなりますので。』

と、おかみさんが、いぶかしさうに訊くのも聞き流して、外に出た。聞き流すつもりではなかつたが何んと答へようにも物がいへなかつた。おかみさんたちが、いぶかしさうに見送つたのも、一人だけ歸つて行くのが不思議だつたといふより、寧ろ、こちらの顔いろがをかしかつたからであらう。血相變へて、みぐるしい恰好だつたに違ひない……

(それほど、みじめな氣持ちにならなかつた。好いではないか。大威張りで歩ませう。あたしは善いことをしたのだ。泣き顔してゝなければ出来ないほどなら、友達に戀しい人を譲るといふのも、愚かな偽善だつたのか。いや、そんなことはない。どう焦つて見たところで、あの人は眞理子さんが一番いゝのだ。あたしは、最もかしこい事を實行したとけのことぢやないか)

裏通りから、資生堂の方へ歩いて行き、その角の自動電話の中に入つて行つた。

彼女は、電話帳を繰つた。その指さきが、すこし震へた。やつと小澤塗料商店の番號を捜じて、番號盤をまわした。

『もし、小澤塗料商店？ 小澤さんはいらつしやいますか知ら』

『社長は私宅に歸りました』

『お邸の電話番號は……』

さういふ順序を経て、やうやく私宅の小澤氏を電話口に出すことが出来た。

『わたくし、眞理子さんのお友達で近藤と申すものでございますが、至急、眞理子さんについ

て、お話ししたいのでございます』

『はア。どういふ御用か知りませんが、二三日後にして下さいませんか、明日から、ちよつと旅行します。歸京してからなら、いつでもお目にかゝります』

『御旅行なさいませぬ。』

『實は、明日眞理子をつれて、箱根の方へ行かうと約束しましたので……』

『もし、もし〜』

電話の線に故障があるらしい。田鶴子はやつきになつて、受話器掛けを叩いた。

女中が臺の上に料理を選びはじめたので、二人は暫く黙つた。やがて、その女中が去つてしまふと、榎本は氣を換へたやうに、

『眞理子さん、もう何も云ひますまい。今夜はむかしに返つて仲よく遊んでお別れませう。』

或は田鶴子さんは失望するかも知れないが……』

さういつて、彼は盃をあげた。

『田鶴子さんが、何を失望なさいませぬの？』

『あの人の工作なんですよ、こゝに、あなたと僕を落合はせるやうな機會を作つたのは——』

『まア、何んのために……』

『おせつかいすね』

と榎本は笑つて、

『つまり二人で懇談して、婚約するやうな結末になつて呉れと、あの人は望んで呉れてるわけだ——すゝぶん無駄なことをする人だ』

『さうですわ、無駄なことですわ』

眞理子は悲しみをこめて、さう相槌を打つた。そして、さきほど、こゝへ來る途々、繰返し繰返し田鶴子がいつて呉れた暗示的な言葉を想ひ出した。『まだ遅くはない小澤との婚約を取消して榎本の胸に飛び込め、今からでも、おそくはない！』田鶴子はさう煽動して呉れた、だが……

『しかし、お目出度う——』

しんから優しさのこもつた樫本の聲に、眞理子の心は餘計かなしくなつた、小澤との婚約を、樫本に祝福されるのは、一番つらいのだ。

『お目出度う、僕は、あなたにお目出度い話が纏まつてゐると聞いて、こんな嬉しいことはないんですよ』

『ほんとに、嬉しいと思つて下さる？』

眞理子は、思はず聞き直るやうになつて訊いた。

『どうして、嬉しくなくて居られる？ほんとに、心からあなたの幸福を祈つてる僕として……』

『嘘です！』

さう叫んで、昂奮しては見苦しいと思ひ直したが、しげんに激して来る感情を、眞理子は抑え切れなかつた。

『嘘です、あたしみたいなもの、よその人と結婚して、厄介ばらひしたとお思ひになつてるんだわ。もし、あたしに友情でも厚意でも何んでも愛情らしいものを持つて、下さるのだつたら、あんな人と婚約したことを、悲しんでこそ下さつても、決して喜んで下さらないはず』

よ』

『無茶をいつてはいけない』

と、樫本は明らかに狼狽して口ごもつた。

『いゝえ。ほんとの話です。あたし、もう何も彼もいつちまひますわ。あたしは、どんなに永い間、あなたをお慕ひしてたでせう、だのに——運命だつたんです、あたしは、あなたを諦めました、思ひ掛けない人と婚約しまつたのも、深い、よく／＼の事情があつたからよ。あなたは、そのあたしを、一とことだつて、可哀想だとはいつて下さらない。あたしの氣持ちを踏みつけて、お目出度う、など、あなたは、あなたは何んて残酷な方でせう！』

涙がこぼれて來た、自分のいつてゐることは理窟に合はない、我から進んで諦め、我から進んで小澤と婚約した、何も樫本を怨む義理はないのだと、心ではハツキリ知つてゐながら、いはずにゐられないこの愚痴。

『眞理子さん！』

云ふと等しく、樫本は眞理子の手を激しく取つた。

『眞理子さん、よくいつて呉れた有難う！有難う、眞理子さん』

相手の手を引張り寄せながら、樫本の顔も涙だらけになつてゐた。

『しかし、眞理子さん、諦めたのは、あなただけぢやなかつたんだよ、僕だつて、僕だつて、世の中にあなた一人を女だと思ふほどあなたを愛してゐるのに、あなたを諦めてしまつたんだ』

『何を仰言るの、樫本さん』

と、眞理子は驚いて顔をあげた。お互の涙に濡れた顔は觸れ合ひさうなほど、接近してゐた。

『さうだ。おそらく、あなたが僕を諦める決心をつけた一年も前に僕はすでにあなたを諦めてゐたんだ』

『なぜ、なぜ？』

訊いても今は無駄だ！ それなのに、眞理子は息せき切つてさう問はずにゐられなかつた。

『なぜつて——僕は、どうせ、大陸の土となる覺悟で支那に渡つて行つたんだ、大きな理想を

もつてね、大陸で一生を送る僕と結婚するのは、女にとつて幸福ぢやない、あなたを、僕のために、不仕合せにしたかなかつたから——』

『あなたと一緒に暮らすのなら世界のはてで野たれ死んだつて、誰が不幸でせう』

『さうぢやない、あなたは、理想のために人間が嘗めなければならぬ苦勞を、あまりに空想で飾りすぎる、そんなもんぢやない、泥水と、黄色い埃とにまみれた一生といふものはね、生活の享樂などいふものは一つもない、明けても暮れても、砂をかむやうな生活があるばかりだ僕はどうせ新しい東洋の建設のために、といふ理想に捧げた身體だ、だが、あなたは、僕とはちがふ……』

『妻は、良人の理想と共に生きるのが一番幸福ですわ。あゝ、何十萬人の人が、大陸で苦勞してゐるのに、あたし一人が、どうしてその何十萬人の人たちの仲間に入れないつて法があるでせう！』

何も彼も忘れて、眞理子は夢見るやうにいつた。

『だが、もう、どうにも仕様がなない。もうすべては終つたのだ。どうぞ、眞理子さん、あなた

は小澤さんと……』

胸が一杯になつたか、樫本は口を噤んでしまつた。

『樫本さん』

二人はしばらく、手を取つたまま泣いてゐた。

『考へて見ると、ながい間、愛し合つてゐたのに、一度も打明けずにゐたんだねえ、僕たちは』

『さうですわ、そして、お互に諦め切つたあとで、突然、打明け合つてしまつた』

『もう忘れよう、小澤さんと、どうぞ、幸福に暮らして下さいさ』

『あなたも』

といひ、激しい嗚咽が洩れた。そして、言葉をつとけた。

『あなたもあちらで頑張つてね』

『頑張るとも』

だが、いつたん打明け合つてしまつた心と心とは、自分たちの理性と意志にも拘らず、もう

離れ難いほど一つに溶け合つてゐた。その證據に――

『しかし、眞理子さん。愛し合つてゐる僕たちが、もし結婚しようと思へば……』

と、樫本の眼が急に燃えて來た。

そこに、女中が新しい料理を運んで、入つて來たので、二人の話はとぎれてしまつた。

すると、眞理子の、燃え立つた情熱の中に、一條の水のやうに、冷めたい理性が流れ込んで來た。

(あたしは婚約した女だ！)

それにも拘らず、燃えるがまゝに、ほかの男の胸に凭れかゝつて行かうとする心を反省せずにゐられなくなつた。

悲しい反省だつた。

いつたん小澤氏と婚約して、もし裏切つたなら、小澤氏に與へる打撃はどんなに激しいだらう。愛せられることを、すつかり諦め切つてゐた小澤氏だつたのに、こちらから働き掛けて、



情熱を掻き立てるやうなことをしておきながら、今更逃げ出してしまつては、罪もない人を翻弄することになる。ただの騙弄で終れば、まだしも好いが、小澤氏は、一度のぞかせられた愛情の世界を突然また見失つて、はじめよりも、もつともつと不幸になるに違ひないのだ。

一瞬間前の、我を忘れた情熱を顧みて、眞理子は戦慄せずにはゐられなかつた。

『どうしたんです。なぜ、そんな急に黙つてしまつたの？』

椋本は熱い吐息と共に唾いたが。それさへ、今は、眞理子の耳には、地獄の門口に人を誘ひ込む邪しまた音楽のやうに聴えた。

『あゝ、矢張り、駄目です、あたしは悪い女だつたのよ、椋本さん許して下さい』

眞理子はめぐるしさうにいつた。

『あたしは、矢張り、婚約した女だつたのです』

それを聞くと、椋本も、いきなり両手で顔を蔽つて、

『さうだ。あなたはいふのが、本當だ』

それつきり、黙つてしまつた。

料理は冷えて行つた。箸を取る勇氣があつたら、をかしい。

しばらくして椋本は、半ば呻くやうに、とぎれとぎれに、ぎこちなくいつた。

「僕が、わるかつたんだ、折角、あなたを諦める決心をかためて歸つて來たのに——あなたの顔を見ると、自制心を失つてしまつて僕は非常に羞づかしい、笑はないで下さい、ほんとに、恥づかしい——」

『恥づかしがらないで下さい、そんなことを仰言ると、あたし、悲しくなる、あたしこそ黒かつたんです、許して下さい』

椋本にも、小澤にも、許しを乞はなければ、ならないやうな氣がした。

ふと、目をあげると、椋本は矢張り、臺に肘を突いた両手で、顔を蔽つてゐる。泣いてゐるのだらうか、俄に椋本が可哀想になつた。いきなり、彼の顔を蔽ふ両手を取つて、はづしてやつて、そして、彼の頬を濡らしてゐる涙を、この唇から、胸の奥ふかくに吸つてやりたくなつた。

が——そんなことをすれば、もうどうにも後へは退けぬ、どたん場に落ち込んでしまふだら

う』

『あゝ、ごめんなさいね、あたしどうして好いか分らない。あたし歸ります』

眞理子は苦しまぎれに立ち上つた。そして、濡れかけてゐるものを見捨てるやうな氣持ちで部屋を出た。

階段をおり、土間をとほつて、往來に出るまで、無我夢中だつたが、その時、往來の先きに停つてゐた自動車のかけから、つと現れ出た人影——跛足を曳いてゐる。

あつと驚く間もなく、彼女の前に、ひつそりと立つた、小澤である。

### 精神の高さ

『あなた!』

銀座裏の、うすぼんやりと明るい夜色の中で、片輪の婚約者と相對して立ちながら、眞理子はわな／＼震へた。

小澤は、にこりともしないで、

『車におのりなさい。待つてゐたんだ』  
といつた。

『どうして、こんな所へ、いらしたんです?』

『そんなことは、どうでも好いから、お乗んなさい』

はつきりと、底力のある聲、抗すべからざる命令のやうに、彼女の心に迫るものがあつた。

なぜ、小澤が、こんな所に来てゐたのだらう? あまりに思ひがけないことなので、眞理子はすつかり狼狽し、混亂してゐた。その上、いつ料亭の中から出て來るかも分らない極本に、こんな場面を見られるのもつらいやうな氣がして、小澤のいふまゝに、あわてゝ自動車の中に入つて行つた。

車はすぐ動き出した。

座席の端と端とに、なるべく離れて坐りながら、小澤も眞理子も、しばらく黙つて車の動搖に身をゆだねてゐた、が、

『どこへ行きますの？』

と、真理子は、黙つてゐるのが苦しくなつて訊いた。

『歸るんだ』

『お邸に？』

それには返事をしないで、

『僕が、あんな所にあなを待つてゐたからつて、驚いてはいけません』

『でも、どうして……』

『知らせる人があつたのです、驚いたのは僕の方です、夢中で飛んで來た、恐らく、あなたを刺して自分の喉も突くほどの、無頼漢のやうな覺悟を以て……』

ぎくりとして、真理子は、身を震はせた。

『きつと、きつと、田鶴子さんが……』

『さうです、近藤田鶴子といふ人が、電話で僕に面會を申し込んで來たんです。逢へないと答へるといきなり、お前は真理子をお金で縛るやうなことは止せといふのだ。そんな事はないと

いつてやりました。すると田鶴子さんは——どうあらうとも、田鶴子は諦めて貰はなければならぬ、でない、真理子は戀しい男と添ふことが出來ぬ。さういつて、電話の向ふで、どうやら泣き出したやうな様子で——』

『まア！ 何んて人でせう！』

『真理子さんに、戀人なんか、決してないと、僕は信じる通りにいひました、が、さういつた時には僕はもう半分カツとなつてゐた、すると、田鶴子さんは、いや、真理子さんには、むかしから深いひかはした愛人がある。現に、その男と、銀座裏の『大隈』といふ小料理屋で逢つてゐるのだ。男は久しぶりに中支から歸つて來た。どうしても、あの二人をこゝで婚約させなければならぬ……いろ／＼田鶴子さんはいひつゝけたが、僕は、その話の途中で、氣ちがひめ、と呟いて受話器を掛けてしまつたんです。だが……電話は切つたが、僕の心は憤りと悲しみでたぎり立ちました。あなたに限つて、人を裏切るやうなことはしないと信じようとしたのだが、どうしても、ちつとして居られなくなり、眞偽を確めるつもりで、大隈の前まで車に乗つてたんです。そして、あなたが出て來るか、どうか、あゝして待つてゐるうちにだん／＼

心は鎮まつて来たが……」

廣い日本間の書齋の、机の上には、出る時の多少の心の亂れをあらはして、頁を開いたまゝの書物が、斜に投げだされたやうに置いてある。眞理子をつれて歸つて来た小澤は、そこに坐ると、その書物を閉ぢ、きちんと正しく置き直した。

眞理子は、罪人のやうに、しよんぼりと、机の横に坐つた。

『一時はカツとなつたが、考へて見ると、大人氣ない話だつたのです。『大隈』の前まで来たのだから、自動車の中にひそみながら、あなたの出て来るのを待つてゐる自分の姿を想像すると、何んとも淺ましくなり、滑稽にもなつた、あんまり滑稽なので、四十にもなつて、つひ涙が出てしまつた、可笑しな話だ』

小澤の微笑は、寂しさうに歪んだ。

『済みません』

眞理子は、小澤が氣の毒で、心から頭をさげた。

『でも、あたし、決してあなたを裏切るやうなことはしませんでした』

『いや、そんなことを、今こゝで問題にしなくても好いんです』

『いゝえ、いはせて下さい、あたしは裏切りませんでした。でも、でも……ほんたうは、今夜會つた人は、あたし、むかしから好きだつたんです。出来ることなら、結婚したいとも思つてゐました。』

『ふむ、矢張りね……』

『田鶴子さんは、あなたに、あたしとあの人とを結婚させようと思つて、それで、あなたにお電話したのだと思ひますわ。今夜、あの人とあたしを無理矢理に會はせたのも、田鶴子さんなんです』

『すると近藤田鶴子さんの目から見ると、僕といふ男は、愛人同志の結びつくのを邪魔する憎まれ役なんだな。いや、實際、その通りなんだから仕方がないが……』

もう一度、小澤は微笑したが、今度は少しも歪んだ微笑ではなかつた。寂しさうではあつたが、やさしい物柔らかな表情で、